

42410

教科書文庫

4
810
42-1938
01304 49267

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

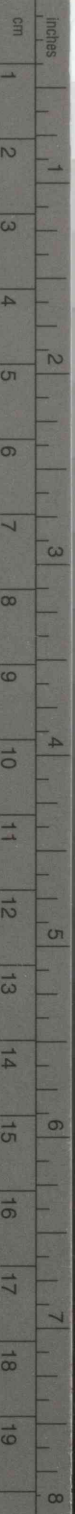


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

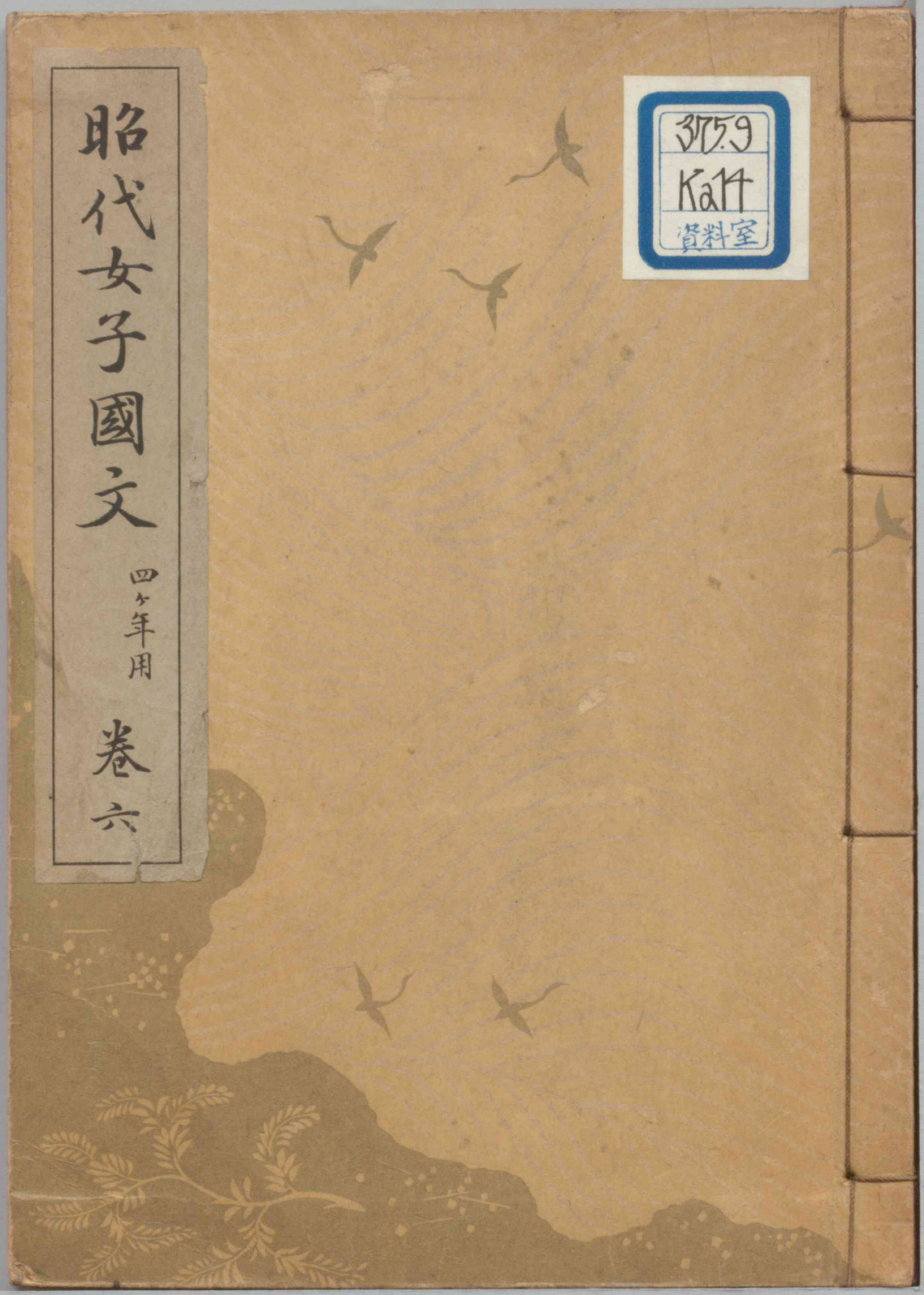


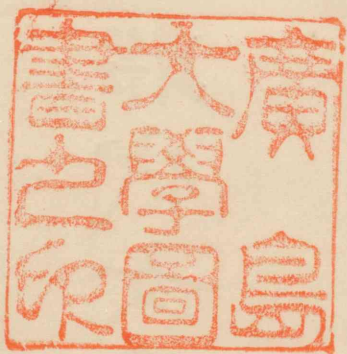
375.9
Ka11
資料室

昭代女子國文

四ヶ年用

卷六





謠曲「熊野」文の段

甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しし如く、何とやらんこの春は、年古り増る朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ぶばかりなり。たゞ然るべくは、よきやうに申し、暫しの御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずば、孝行にもはづれ給ふべし。たゞ返す返すも、命の内に今一度、見參らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよ／＼見まくほしき君かな。

目次
一 雁がね
二 神の國なる東より(詩)
三 塙檢校之碑
四 身邊秋心
五 明治節(長唄)
六 雁三題

昭代女子國文 卷六

目次

一	禁庭の野分	………	(昭憲皇太后御作)	………	[謠曲全集]…巻頭
二	神の國なる東より(詩)	………		………	西條八十…三
三	塙檢校之碑	………		………	芳賀矢一…六
四	身邊秋心	………		………	若山喜志子…二
五	明治節(長唄)	………		………	神尾光子…一六
六	雁三題	………		………	樋口一葉…三

二 雁(詩).....	千家元麿.....三三
三 空行く雁.....	〔會我物語〕.....三五
七 金鈴より無憂華へ.....	久松潜一.....三三
八 若さが魅力の滿洲國.....	長與善郎.....三七
九 いさよふ月に誘はれて.....	阿佛尼.....四〇
一〇 神道.....	本居宣長.....三〇
一一 秋懷(詩).....	薄田泣菫.....三五
一二 橘曙覽とその妻.....	相馬御風.....三五
一三 月の出に阿彌陀様が(手紙).....	大町桂月.....三六
一四 鹽原.....	尾崎紅葉.....三七
一五 隱形 <small>おんぎやう</small> の咒 <small>じゆ</small>	〔太平記〕.....三六
一六 木賊刈.....	〔雨窓閑話〕.....三八

一七 寫生.....	正岡子規.....六六
一八 小磯の小貝(俳句).....六九
一九 新島守.....	〔増鏡〕.....九二
二〇 島なる父へ(手紙).....	〔源平盛衰記〕.....一〇四
二一 春日淺光.....	吉田絃二郎.....一〇七
二二 人臣の道.....	北畠親房.....一一〇
二三 菅公の夫人.....	山田新一郎.....一二四
二四 初雛を祝ひて同じく返事(手紙).....一三三
一 初雛を祝ひて.....	樋口一葉.....一三三
二 同じく返事.....一三三
二五 自然の愛.....	藤岡作太郎.....一三四
二六 春を待ちつつ詩二章.....	島崎藤村.....一四〇

目次終

一 春を待ちつつ	一四〇
二 詩二章(詩)	一四四
小諸なる古城のほとり	一四四
千曲川旅情の歌	一四六
二七 高瀬舟	森 鷗 外 一四
二八 女性の自覺	德 富 蘇 峰 一五



昭代女子國文 卷六

昭憲皇太后

御名は美子(ヘルコ)

明治天皇の皇后

大正三年(三毛四)崩御

御年六十五

一 禁庭の野分 [昭憲皇太后御作]

朝露のひるまはさしもなかりし空の、にはかにかき曇り、夕づつ
の光も見えず。とかくする程に、雨いたく降出でて、ほとり近
く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は、
なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷かみさへ鳴りはた
たきて、夢現とも思ひ定むるひまなく、稻妻のきらめき渡る、いと
けうとし。暁がたには雨はをやみぬれど、風烈しう吹出でて、宮
のうちにゆるぐばかりなるに、いと目もあはず。

上
明治天皇

遠き境
明治十四年北海道及
び東北地方を御巡幸
遊ばさる
皇太后の宮
英照皇太后
孝明天皇の皇后

上には、民のためとて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にましくて、この風の音に御心を惱まし給ふらん。皇太后の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも



昭 憲 皇 太 后

驚きやし給ふらんと思ひ續くる程に、夜も明けぬれど、未だ風静まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今を盛りと見えし眞萩も、名残なくちり亂れたる、いと寂しく見ゆ。宮の内だに

かく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稲も、吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神もこころして

稲葉の上はよきて吹かなん。

なほとやかくとむねをいたむるほどに、いつとなく静まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちるにけり。

(昭憲皇太后御集卷下)

科戸の神
志那斗辨神ともいふ
志奈都彦・志奈都姫
の二柱の神をなす
風を掌る

西條八十

詩人
早稻田大學教授
東京の人
明治二十五年(二五三)
生

二 神の國なる東より

西條八十

亞細亞の東、聖土あり、

天地の正氣鍾りて
 藤田東湖の文天祥の
 正氣の歌に和する歌
 に「天地正大の氣、
 粹然として神州に鍾
 る。秀でては不二の
 嶽と爲り、巍々とし
 て千秋に聳ゆ。注い
 では大瀛の水と爲
 り、洋々として八洲
 を環る。發しては萬
 朶の櫻となり、衆芳
 與に備ひし難し。凝
 つては百鍊の鐵とな
 り、銳利鑿をも斷つ
 べし。」とあり

天地の正氣鍾りて
 積むや芙蓉の峰の雪、
 咲くや萬朶の櫻花。
 萬古に互る皇統は
 空に燦たる天の河、
 仰げばふかき感恩に
 一億の民ただ涙。

ああ、この國の雪純く
 嘗て異寇に汚されず、
 ああ、この國の花赤く

君臣の義と云々
 雄略天皇の御遺詔に
 「義は乃ち君臣、情
 は父子を兼ぬ」とあ
 り

神の國なる東より
 「光は東方より」
 古代ローマ人の言ひ
 ならはしたる語

つねに正義の熱に咲く。
 君臣の義と父子の愛
 花糸のごと絡りて、
 仁慈と忠と孝悌と
 琴のごとくに弾きあそぶ。

いま西歐に日は暮れて
 光を呼ばふ聲すなり、
 世界は明けん、ほのほのと
 神の國なる東より。

芳賀矢一

國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教
授

國學院大學長
昭和二年(一九一七)薨
年六十一

塙保己一

江戸時代の國學者
武藏の人
文政五年(一八二四)歿
年七十七

この村

埼玉縣児玉郡金屋村
大字保木野

大正十年
紀元三二二二年

三 塙檢校之碑

芳賀矢一

贈正四位塙保己一先生は東西に例なき偉人なり。この村よ
りかくの如き偉人を出ししは、眞にこの村又この郡の名譽とも



塙 檢 校

いふべし。

大正十年はこの偉人の歿
後一百年に當れるを以て、郡
の有志相謀りて遺蹟保存會
を組織し、記念祭典を行ひ、尙
ほあまねく全國の贊同を仰
ぎて記念館を建設し、又この
碑をも立つることとなせり。今より後、學生は教師に引率せら
れて次々に見學に來るなるべく、遊覽者は遺物の展覽を楽しみ

神明に誓ひし
檢校三十四歳の正月
元旦、群書類從編纂
の大計畫を立てるや
其の守護神として信
仰された天滿宮に祈
り、「毎朝心經百卷を
讀誦し、積んで百萬
卷を満たさん」と
誓ひしことをいふ

として遠近より尋ねよるなるべし。
さて始めてこの地に遊ぶ人の感想や如何。偉人の出生地
としては餘りに平凡なり。と失望する人もあらん。この片田舎
の目無子が、よくも學問に心を寄せしよ。と不思議に思ふ人もあ
らん。「目明人も讀得ぬ千萬卷の古書を讀みもし、版にもして世
を益せられしは、人間業とも覺えず。とて、今更にその偉業に舌を
巻くもあり。「飛驒工ほめて造れる眞木柱の一たび立てし志は
動かず撓まず、神明に誓ひし初一念を晩年に成遂げられし意志
の強さを、これぞ成功の祕訣なるべき。とて、譽めたゝふるもあり。
「常人の堪ふべくもあらぬ困難辛苦に打克ちて、世に不可能とい
ふ語なきことを示されたるぞその一生なりける。非凡といひ、
超人間といふは當らず。とて、ひたすらその努力に感じ入るもあ

群書類従
五三〇卷
千二百七十三種の古
今の和書を神祇・帝
王等二十五部門に分
つて校刻せし我が國
大叢書の始
文政五年（一四〇）成る

しこの精神にして先生の心靈に觸るゝ事なかりせば、先生は唯僻村の一盲人にて終りしなるべく、世界人を驚かせる群書類従の編纂も、印行も、もとより行はれざりしなるべく、百年後の今日の日本も現状の日本とは異なりしなるべし。

「今は昔、この郡この村に盲目の少年ありけり。その心眼の光は今も尙ほ學界を照らし世界を照らせり。」と言はば、人或は謎かとも思はん。されどこは謎にもあらず、空想にもあらずして、疑ふべからざる史實なり。この史實が、未來永劫にわたりて國民に與ふる教訓と感化とは至大至高なるものあらん。來りてこの碑の下に立たんものは、偉人の學徳を追懐するとともに、この偉人をはぐくみ出でたる國家的精神の、更に偉大なることをも認むべきなり。（芳賀矢一文集）

（芳賀矢一文集）

三学期

若山喜志子

歌人

故若山牧水夫人

長野縣の人

明治廿一年（一五四）生

四 身邊秋心

若山喜志子

私は、朝の食事を済ませて、郵便の來るのを待つ間の何となく落着かぬ時間だとか、仕事を片付けて夕飯を待つ暫くの間とかいふやうな時を、よく庭に出てそちこち歩いて見るのが永年の習慣になつてゐる。庭とは言つても、唯廣いだけで一向手入れもしない藪庭だけれど、それでも自分の物として親しんでゐれば、一本の名も知らぬ雜草にも、言ふにいはれぬ趣を見出し、愛着が深くなつてゆくのである。

「ほんのちよつと。」と思つた庭のそゞろ歩きの私が、いつの間にか草取女になつて了つてゐたり、柴刈りをばさんになつて居たりする事がよくある。そんな事をしてゐる間に、私はいろく

の昆虫を知つたり、草木の習性を見分けたりして來たのだが、さうした庭の中でも、一番私の心を惹きつけてくれるのは、何と言つても何時も澄み透つた水を豊かに湛へてゐる池であつて、庭のどこを歩いてゐても、最後には必ずその池の水際に足を止めて、靜かな水の面にじつと見惚れる私である。

庭の池にころろき落つる眞清水は

苔のむしろを暫しくぐるも

すみとほる清水の池に育てばか

鯉はいよいよむらさきに見ゆ

この庭の池には、鯉が三四尾と鮒が二百尾餘り棲んでゐるであらうか。割合に廣い池なので、二百尾位の數ではほんの二三十尾位にしか見えない。最初の間は鯉と鮒の見分けさへ附か

なかつた程の私だつたけれど、この頃になつてやうやく鯉の眞の美しさが解つて來、鯉は何と言つても眞鯉に限ると思ふ様になつてしまつた。

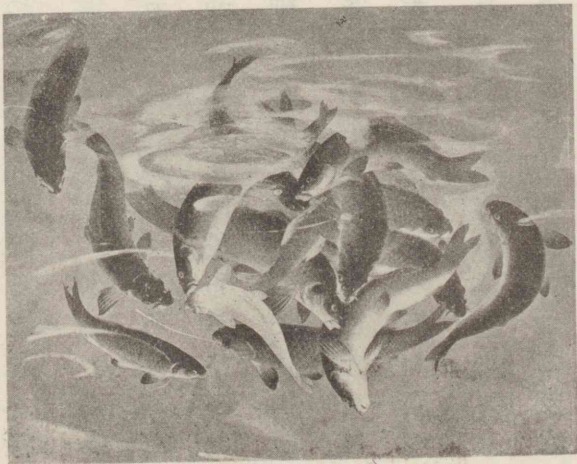
私が茲で眞鯉といふのは、或は私一人の獨斷でさう定めてゐるのかも知れないが、とにかく獨逸鯉などとは段ちがひの、高貴な氣品を備へた、少し細身の鱗も細かく緊つた感じで、光線の工合によつては、紺にも紫にも見えるあの鯉を、私は眞鯉だと固く信じてゐる。さうした鯉を、水の美しい池にほんの僅か放つて朝夕眺めたい私である。

先だつて、とは言つても七月末の事、私は京都に行つて、友人に案内され南禪寺の瓢亭といふ所へ行き、其處で其の家の御自慢だと聞く茶粥を御馳走になつたのであつたが、その凝つた茶人

南禪寺
臨濟宗南禪寺派の大
本山
京都市左京區南禪寺
町

熊本の水前寺
元は寺名、今は地名、
熊本市外今出水村と
いふ
公園となれり

向きの料理の味と共に、自慢であらうと見た庭の泉水に、それは
又どういふ凝つた趣向かは知らないけれど、清冽な見るから涼
しい水に放つてある無数の鯉が、
殆ど全部と言つてもよい位、何と
いふ種類の鯉か變に粘つこいや
うな、ふよ／＼した感じの、見てゐ
ると胸の悪くなるやうな怪奇な
斑鯉ばかりを泳がせてあつたの
には、驚かされたと同時に私には
ひどく興ざめの事であつた。
私の今日まで見て來た鯉で、美
しかつたと記憶に残つてゐるのは、熊本の水前寺の鯉と、廣島の



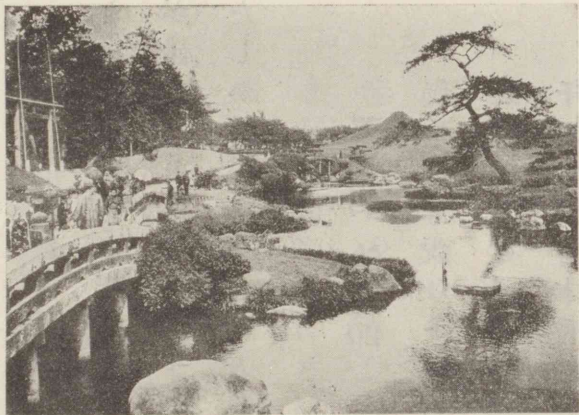
魚 紋 川 端 龍 子 筆

廣島の泉邸

一に縮景園といふ
廣島市上流川町にあ
る庭園
舊藩主淺野氏の別墅
美濃の大井町
岐阜縣美濃國
大井町は中央本線に
沿ふ

泉邸せんていのそれと、美濃の大井町の何とかいふ舊家の旅館の池で見

彦根の玄宮園
滋賀縣彦根市
玄宮園は彦根藩公の
造營に係る名庭園
城北にあり
西を樂々園といひ、
東を八景亭玄宮園と
いふ



たそれ位の物であらうか。彦根の
玄宮園のあの廣い池の鯉も、数の多
かつた事で忘れない。
水を泳ぐ魚の姿といふものは、沁
沁見てゐればある程親しく靜かな
ものである。私の庭の池には鯉・鮒
の他にかじか鮒が二三尾と、鮮かな緋鯉が
たつた三尾交つてゐる。その緋鯉
は群を離れてゐる時も美しいが、他
のに交つてゐる時、その緋の色が他の魚の横腹に虹のやうに反
映するのを、私はこの上もなく美しいものに眺めるのである。

私はこれらの魚をじつと見てゐて、曾て
 うろくづの瞬まばたきするはあはれなり
 鯉も緋鮒もまばたきにけり。
 といふ歌を詠んだ事がある。ところがそれは嘘歌だといふ事
 が後でたしかめられ、すつかり悲觀してしまつた。でも私には
 たしかに瞬まばたきをしたと見たのであつたが……。(東京日日新聞)

五 明治節

幾千代も祝ひまつらん明治節、
 御代明らけき菊のはな、
 千もと八千本香にいでて
 清き代々木の神垣や、

神尾光子

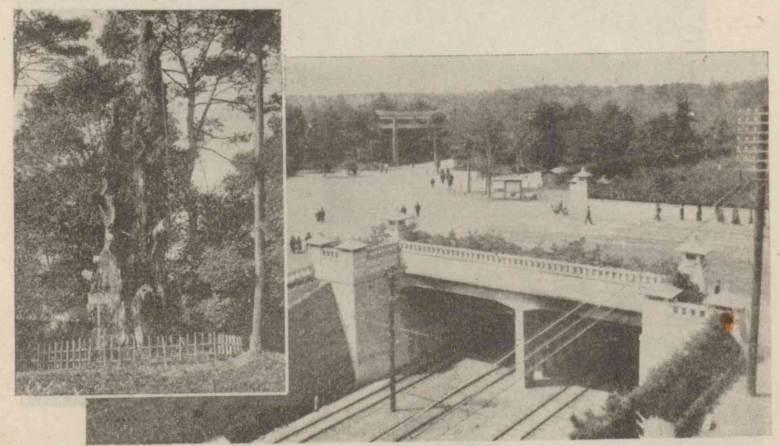
神尾光子
 歌人
 東京の人
 明治二十三年(二五〇)
 生

代々木
 東京市澁谷區の地名

宮居
 明治神宮をさす

宮居たふとき御しめ繩
 仰ぐあしたの空高く
 霞にまがふ大鳥居
 天なる虹をかけ渡す
 參宮橋のゆきかひに、
 きびす重なるにぎはひも
 治まる御代の松のいろ、
 四方の景色もとのひて、
 豊旗雲のなびきたる
 森の中道分けゆけば、
 代々木と指しし老木こそ
 御代の佳例かたをうつし文。

代々木
 代々木と言ふ町名のもとなりし古木の由來書のことをいふ



(左) 水々代と (右) 橋宮神

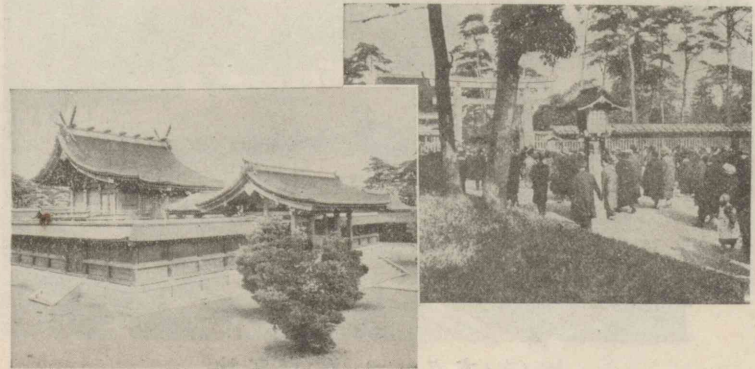


寫謹觀大山横

宮神治明

千代に八千代に
君が代はの歌

神鈴かしこくして、社殿の御前に、
みいつはあふれかがやけり。
千代に八千代にさざれ石の
巖となりて苔のむすまで。
千早振る神にささげて惜しからぬ
命にやどる露の玉、
のちの代かけてねがひ祈らん。
あり難や心もいとど眞清水に、
をろがみまつる大君の
まします方ぞあやに尊き。
千代千代とうたふ小鳥の枝うつり、
ときはかきはのほの見えに



(左)殿本御と(右)門神南

民草の
明治天皇の御製
「奇民祝」

國榮ゆれば
それ治まれる御代の
しるしには、賢人も
山よりいで、聖人も
君に仕ふといへり
(謡曲 岩船)

うつし繪島か繪畫館。

南參道北參道

西も東も神苑の

こころぞひろき菖蒲池。

そめて都のあやにしき、

民草のしげりそふこそ葦原の

國のさかゆくもとゐなりけれ。

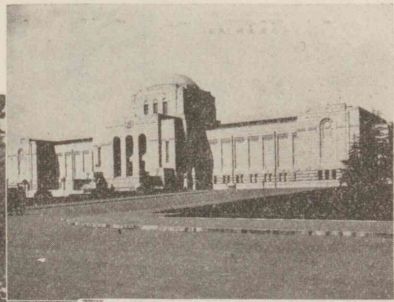
御製はのちの教へ草、

國榮ゆれば草木色を増し、

賢聖も山よりいでて君に仕ふとかや。

ためしを北に南に、

國の境を守る子も



(左) 池 菖 蒲 と (右) 館 畫 繪

菊の盃千代の影
 神の恵を仰ぎつつ
 汲むや千壽の菊の酒。
 島のをどりをひとをどり、
 國境の唄、聲たかく
 唄ふ友鳥友千鳥、
 仲のよいよいよい同志
 神をあがめの里神樂、
 遠音太鼓やラッパの音
 巷の樂も色添へて、
 ふむは日本の足拍子、
 歌謠の振りの袖さへ長く

今日をいはひの國の秋晴れ。

六雁三題

一雁がね

樋口一葉

朝月夜の影空に残りて、見し夢のなごりもまだ現なきやうな
 るに、雨戸あけさして打眺むれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひ
 て、そゞろ寒けく身に沁み渡る折しも、落ちくるやうに雁がねの
 聞えたる、孤つなるは猶ほさら、列ねし姿もあはれなり。思ふ人
 を遠き縣などにやりて、明け暮便りの待ちわたらるゝ頃、これを
 聞きたらば、如何なる思ひやすらんと哀れなり。朝霧夕霧の紛
 れに、聲のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音
 きこえて、月すむ田面に落つらん影思ひやるも哀れ深しや。旅

樋口一葉
 女流小説家
 名は夏
 東京の人
 明治廿九年(三五六)歿
 年二十五

下谷
東京市下谷區



山 口 素 綯 衣 筆

寢の床、佗人の住家、何れに聞きても物思ひ添ふる種なるべし。
 一とせ、下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も恥し
 き、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきとなしし頃、檐端の
 庇荒れたれど
 も月さすたよ
 りとなるには
 あらで、向ひの
 家の二階のは
 づれを纒かに

もれ出づる影したはしく、大路に立ちて心細く打あふぐに、秋風
 高く吹きて、空にはいさゝかの雲もなし。「あはれ、かゝる夜よ、歌
 よむ友のたれかれ集ひて、靜かに浮世の外の物がたりなど言ひ

三つ口

童謡なり
雁の列の琴柱の形に
なるを「雁々三ツ口」
(兎脣)といふなる
べし。

交はしつるはと、俄かに其のわたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別
 れし雁唯一つ、空に聲して何處にか行く、さびしとは世のつね、命
 つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音に交りて聞えたる如何なら
 ん、「三つ口」など囃して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物
 のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。
 (現代日本文學全集)

千家元麿

詩人

東京の人
明治二十一年(三四)
生

二 雁

千家元麿

暖い靜かな夕方の空を、
 百羽ばかりの雁が
 一列になつて飛んで行く。
 天も地も動かない靜かな景色の中を、不思議に黙つて、
 同じ様に一つ／＼せつせと羽を動かして、

黒い列を作つて、
静かに音も立てずに横切つてゆく。
側へ行つたら翅の音が騒がしいのだらう、
息切れがして疲れて居るのもあるだらう、



雁
筆 畝 寛 木 荒

だが地上にはそれは聞えない。
彼等は皆が黙つて、心で^{いたは}勞り合ひ助け合つて飛んでゆく。
前のものが後になり、後のものが前になり、

心が心を助けて、せつせくと勇ましく飛んで行く。
その中には親子もあらう、兄弟姉妹も友人もあるにちがひ
ない。

この空氣も和らいで、静かな風のない
夕方の空を選んで、
一團になつて飛んで行く
暖い一團の心よ。
天も地も動かない静かさの中を汝ばかりが動いてゆく。
黙つて、すてきな速さで、
見て居るうちに通り過ぎてしまふ。
(千家元麿詩集)

三 空行く雁

〔會我物語〕

養和元年
紀元一八四一年
一萬
曾我十郎祐成
箱王
曾我五郎時致

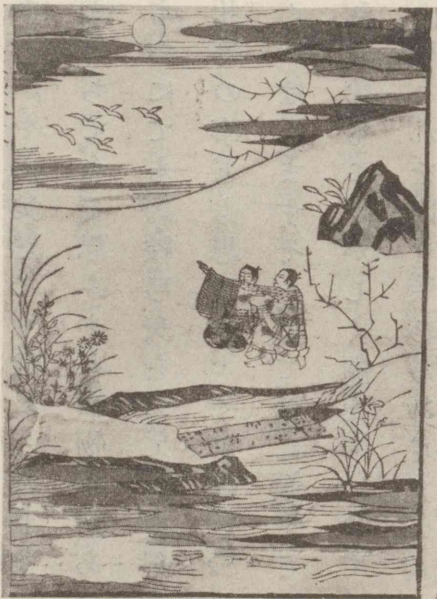
曾我殿
太郎祐信

工藤一蕨
左衛門尉祐經
鎌倉殿
源 頼朝

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きてをがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ。といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今さら思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く泣くのたまひけるは、あの曾我殿こそおのれ等が父にてあれ。と心づよく語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王かさねて申しけるは、父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一蕨とやらんに射られ、死に給ひぬ。と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらを

此の里
神奈川縣足柄上郡曾我村

も殺さんとや思ふらん。われらが此の里に在りと知らでや過ぐらん。など、おとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、



雁く行空
語物我曾本綠丹

皆袖をぞ絞りける。かくて、夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でてあそびゐたるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿空を飛ぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いは

河津殿
三郎祐泰

ぬ鳥類すらかくのごとし。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われらより幼きものにて、馬鞍、弓矢をもて、物を射ありくことの羨ましさよ。此等の事ども思ひつゝ、くれば、いつより今宵は父御前の戀ひしくおはしますぞや」とて、袖に顔をさし入れてさめくと泣きければ、弟もござかしく顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞きて、あな、あさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤達、夜も更けぬるにさやうにてはおはするぞ。とくく入らせ給へ」と、怖しげにいひければ二人のものは門外へ逃げいでて、思

ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

其の後は二人の者ども、我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合はせて互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時、兄弟は竹の小弓に、薄^{うす}羽の^は小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人はたち向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱玉に申しけるは、我等もいつか成長し、和殿十三われは十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經



兄 第 北
弓 尾
を 重
射 政
歩 筆

をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。
和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能
にてあるなるぞ。といひければ、弟もうち領きて領掌しけり。「年
ばへには怖しきことかな。」と人々思ひけり。

一萬の乳母、この由を聞知りて、おほいに驚きて、母にかくと申
しければ、母も大いに仰天し、二人の子どもをよび寄せ、泣くく
語られけるは、まことか、おのれ等がさも怖しき謀叛を起さんと
議し合ふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おの
れ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵
に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ
給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御
敵に申しなして失はるべし。その時、千度百度悲しむとも叶ふ

伊東入道

祐親

千鶴

母は祐親の女

松河が淵

静岡縣田方郡伊東に

あり

左衛門尉

祐經

石橋山の合戦

治承四年八月の合戦

石橋山は、神奈川縣

足柄下郡にあり

土肥

同郡土肥の山谷

石橋山の南

梶原景時

頼朝の寵臣

べきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申し
て止まりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦に打負けて、土肥
の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせ
て助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆
返し參らせて、「二人の幼き者どもを助けて給はらん。」と申されけ
れば、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それ程の志ならば、二人の子供、祐信に
預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今まで希有
の命を保ちたるなれ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば、生々
世々にも報じ盡くすべきか。鳥類畜類にても恩を知るとこそ
聞け。況んや、汝等人倫に於てをや。然るを、却て曾我殿に歎き
を與へんこと、返すくも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思
はば、速に謀叛をとむべし。」と、口説きたてて誠められければ、

二人の子ども、目と目とを見合はせ、顔うち赤めて立ちにけり。
それより後は、人の聞かぬところにては内々談議しけれども、
人目にあらはれては語り合ふこともなし。母も内々怖しき者
どもの心ざまかな。と思はれければ、弟の箱王をば出家にせんと
思はれけり。
(會我物語)

久松潛一

國文學者

文學博士

東京帝國大學教授

愛知縣の人

明治二十七年(三五四)

生

金鈴

九條武子の歌集

無憂華

九條武子の歌文集

七 金鈴より無憂華へ

久松潛一

ゆふがすみ西の山の端つつむ頃ひとりの吾は悲し
かりけり。
みわたせば西も東も霞むなり君はかへらずまた春
や來し。
金鈴の中からこれらの歌を口誦して離愁の情緒の心ゆくま

藤村氏

高崎藤村

若菜集

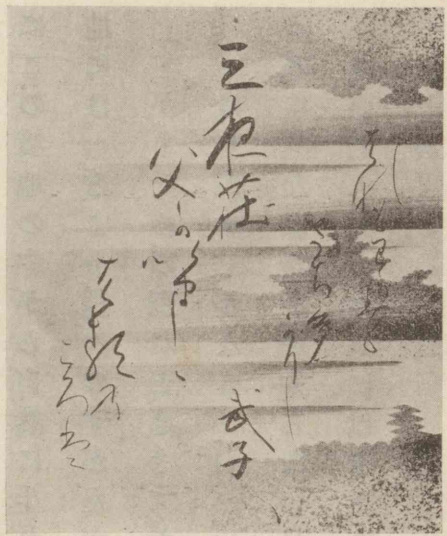
藤村の詩集

筆蹟

三夜莊父がいまし、
はるのころは、はな
もわが春もさち多か
りし 武子

孤棲十年

夫君九條良致男爵
が、歐洲に留學する
こと十年、その間武
子夫人は京都に獨り
棲む



九條武子筆蹟

で浸つたのは、かなり以前のことである。これらの歌には、幾度
誦しても飽きない眞實感がみなぎつて居る。それは藤村氏の
「若菜集」が、永遠にうせなない青年の情緒を其のまゝうたつて居る
意味に於て、いつまでも亡び
ないものを有するのと同様
である。こゝに詩歌として
の價値を比較しようとは思
はない。それは價値を離れ
た眞實そのものである。詩
の誕生である。
九條武子夫人はこゝから歌の世界に入られた。孤棲十年、思
ひを遠き夫君のもとに走らせる時、自然に歌が生れた。作つた

歌ではなく生れた歌である。それが、典雅な教養によつて無限に妙なる色彩をそなへられたのである。夫人の金鈴は、まことにこの境地の中から自然に生れ出た詩の世界である。その境地には、もとより種々のすがたがある。

かりそめの別れとききておとなしうなづきし子
は若かりしかな。

流石に純なる疑ひを知らない日をなつかしむの情もある。

いくとせをわれにはうとき人ながら秋風ふけば戀
しかりける。

怨み心から慕ふ心へと變り、さては、おのれてふものいましむと人のつくりし掟とも觀ずるのである。時には十年の離愁から、父への愛慕となり、自分への愛着ともなり、寂光の常世の春への

寂光の常世
寂光土又は寂光淨土
といふに同じ

思慕ともなる。

かういふ境地に於て夫人の歌は生みだされた。さうして夫人の人格はいよゝ美しく清くされた。金鈴はまことに此のあはれにして清き純情の詠歎であつた。さうして夫人の境遇の變化は、その歌を如何にして展開せしめたか。私どもはこれを無憂華によつて見られ得るのである。

無憂華は、唯ひたふるの純情から生れた夫人の詩情が、内面的沈潜によつて叡智の世界へ入つたものではなからうか。さうしてその叡智が自然の言葉となると共に、歌・戯曲等の形態の中にとけこんで居るのである。それは純情のみではない。これを「幻の柱」の中の歌に見ても叡智の光が見られるのであらう。「夕波」または「蔓草」の中の歌を見ても、金鈴の純情が複雑になり、や

幻の柱・夕波・蔓草
共に無憂華の中にあ
る和歌を集めた題目

洛北の秋

無憂華中の題目

蓮月

「洛北の秋」の主人公

の名

生滅・跪づく心・慈

眼のまへに・一如

の愛・悟りの白道

皆無憂華中の小題目

や理智が入ると共に、自照・觀照のさまじくの相が見られるのである。これが自から無憂華のさまじくな随想もしくは法語ともなり、さては戯曲、洛北の秋ともなつたのであらう。流轉の世相、輪廻の姿を靜かに眺めた、蓮月は、やがて「生滅」を説き、跪づく心を語り、慈眼のまへに「を説き、一如の愛を語り、悟りの白道を述べる夫人その人の眞實なる姿ではなからうか。

斯くして、卷頭の歌

おほいなるものちからにひかれゆくわがあしあ
とのおぼつかなしや。

は、夫人の強くして弱き、大きくして細やかなる心境の最後の道であつたのであらう。夫人の死を聞いた。純情より叡智へと

春未だ浅くして、私は夫人の死を聞いた。純情より叡智へと

不斷に進まれた夫人の道をもはや此の世では見ることが出来ない。美しきもの清きものはかなさをしみん、味つた。ただすべての人に惜しまれつゝ、美しきがまゝに逝かれた夫人のみたまの幸をいのりつゝ、夫人の歩まれた金鈴より無憂華への道を、純情より叡智への世界を、靜かなる朝よひに顧み偲びたく思ふ。

（歌集 薰染）

八 若さが魅力の滿洲國

長與善郎

處女地と聞くと、何やら一種神聖めいた心持も湧くが、打ち見た所はたゞ濕潤な荒原のあちこちに、放牧の蒙古馬が三々伍々のうぐぐと草を食ひ、その上に暗澹と薄墨を流した空には、この邊の線路附近にも、よく穴から匍ひ出てちよこんと立つてゐる

長與善郎

文學者

東京の人

明治廿一年（西曆）生

ペスト
黒死病
タルバーカン
マーマットの一種。
山撥鼠ともいふ。東
歐からシベリヤ、滿洲
に分布

ゲートル
脚絆
ゴリキイ
一八六八年生
ソヴエートロシヤ
の小説家

哈爾賓
滿洲吉林省の都會
東支那鐵道の分岐點



姿が見られるといふ例のペスト媒介者と言はれるタルバーカ
ンでも狙つてゐるのか、鷹らしい鳥や鍋鶴が高く低く輪をゑが
いてゐる。

驛に入れば、王道樂土の王の字に
北 見える徽章をつけた鐵路局の制服
滿 に卷ゲートルといふゴリキイそ
の つくりの見上げるやうなロシヤ人
或 が、ナイフ程の可愛さに見える日本
景 兵の劍をちよこんと腰に下げ、輕々
と銃を提げて何か物々しくそぼ降
る雨中を右往左往してゐる。見る
もの、聞くもの、ちよつと一と足哈爾賓から奥へ踏み込んだばか

日露戦争
明治三十七八年戦役
のこと

りで、あの今や火熨斗をかけるばかりに、完成の域に入つた南滿
の沿線のそれと何といふ違ひ方か
と誰しも感ぜざるを得まい。考へ
て見れば……と言ふ迄もなく、それ
も當然過ぎた話は話で、日露戦争以
來幾萬の犠牲と莫大な元手を賭し
て、漸くあれ迄に築き上げた所と、ま
だ受取つたばかり、手を著けたばか
り、事業も採算も悉く將來にかゝつ
てゐる未開未拓の新沿線と同じや
うであるべき譯はない。

尤も——こゝで一吋南滿を振返つてみると——肝心な首都



新 京

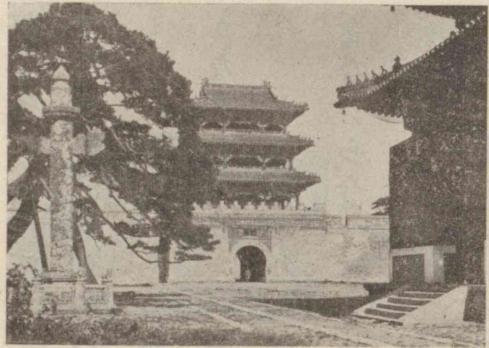
奉天
滿洲國奉天省の大都

新京が完成しきるのに、まだ數年はかゝるだらう。それでも地震の心配のない國の建設は速い。去年の春から一年振りに見る間に、驚く程國都らしい面目を具へてきた。まだ落ちつきはないが、もうガサ／＼した火事場のやうな居心地の悪さや、いかにも新開地らしいものの不揃ひな不體裁感は餘程なくなつた。然し何といつても滿洲で一番落ちついた都らしい都は奉天である。今は先きへくと國力が伸びて行く重心の釣合ひ上、この舊都がやゝ置去りになつてゐる一抹の淋しさがないではないが、結局滿洲でどこに一番永住し易いかと言へば此所であらう。この邊の地下一帯に大きな水の層があり、その層まで掘ればどこからでも滾々たる清水が掬めるといふことも、水に自由な滿洲では珍しく恵まれた事に相違ない。美しい史蹟とし

東陵
奉天城の東八軒にある清の太祖高皇帝の陵

北陵
昭陵といふ奉天の北郊にある前清太宗高帝の陵
四庫全書
清の高宗の蒐輯せし一大叢書

昨年
昭和十年



北陵

ての東陵、北陵、四庫全書を藏めた文溯閣や博物館、かうした文化記念物のあることも人心をしんみりさせる。やがてもし今の醫科大學を擴張して、各科をこゝに置くやうなことにでもなれば、實に好い學都になるであらう。昨年六月開館になつたこゝの博物館に就いては、まだ餘り多く世に紹介されてゐないやうであるが、これは確に唯この異色ある一博物館を觀に行くだけの目的でも、滿洲へ出かける價值があると、いふを憚らないものと私は思つてゐる。旅順の博物館も立派なもの、こゝのはあれ程大きくもなく、内容の多様性もないが、

遼代

東洋史上契丹族の建設せし國
太祖より天祚帝まで
九世二百十年（五七
一七五）

清朝

太祖より宣統帝まで
十二世二百九十六年
（三七六一七五）

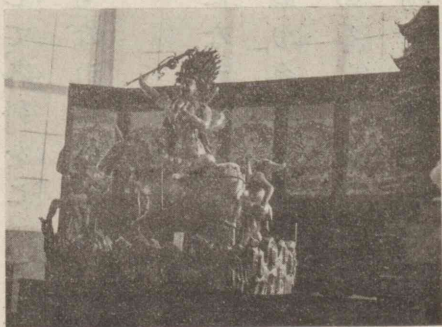
錢舜舉

宋末清初の畫家
宋の景定年中の郷貢
進士

あじあ

大連より新京までの
超特急列車七百餘軒
を八時間半にて達す
カーペット
絨氈

就中陶器の部の遼代の三彩類がずらりと並んでゐる一室の如きは、正に日本にもどこにも見られぬ無類の見事さで、その道の好事家にとつては、一度前に立つたら動けなくなることに請合ひである。清朝初期の南畫にも見るべきものは多いが、あの眼も覺めるばかり鮮かな朱を用ひた錢舜舉の花蟲繪卷など、今でもはつきり眼底に映じてゐる。残念ながら今年度は丁度陳列替への時にぶつつかかり、博物館は觀られなかつた。更に特急「あじあ」で一路哈爾濱へ向つて見る。沿線の風景は依然どこを見てもよく均らされた柿色の土に、緑の縞との柔かな一枚のカーペット。單調と言へば確

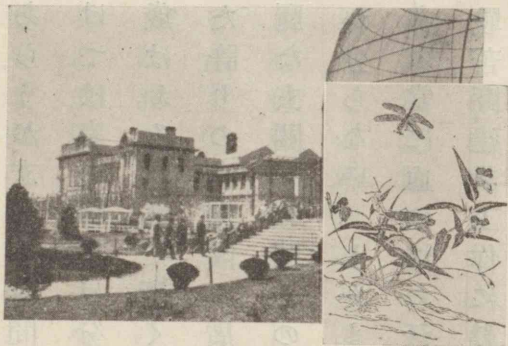


泰天博物館

エプロン
西洋前掛

葉卷

葉卷煙草
ゴルフ
球戯の一種

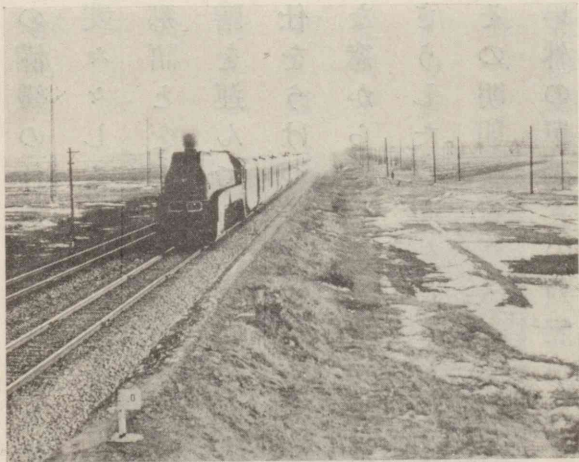


花蟲繪卷
錢舜舉
と旅順博物館

に單調だ。しかし時速百二十キロとか三十キロとかいふ流線型白綠色の車の中で、清楚な空色の滿鐵の仕着せにエプロンの姿も甲斐々々しく、日本語と、英語と、僅かの支那語とをどうにか使ひ分けながら、お膳を運んでくる金髪の白露娘のお給仕をうけつゝ、大きく仕切られた澄明な窓から眺める大陸的风景は、此方がさうした快適を恣にしてゐて見ると、その明朗颯爽たる内部の國際色と、懶い外の單調との對照が又一種調和して、清新な元氣に満ちた現代的な畫に見えてくる。これが、今や功成り名遂げて、悠々葉卷を吹かしながらゴルフをやる

ブルジョア
(佛蘭西語)
有産階級の人
中産階級の人

ブルジョア満鐵の玄關なのだ。三十歳の壯年満鐵は「身退く」どころか、これからが奮闘だと、益々元氣旺盛な意氣込みであるのであらうが、玄關と客間を覗いたゞけでは家の様子は分らない。卅歳はおろか、まだ漸く五つになつた許りの満洲國の廣袤は、この奇麗な玄關と客間との何十倍あるか分らない。しかもそこそ現
在本當に血の滲む汗を流して惡戰苦闘、建設工作に勤しんでゐる活きた満洲國の舞臺なのだ。



特急「あぐあ」と内内

事實、満洲の面白さ、魅力はすべてその「若い」所、まだ出來上つて

ゐない所にあると言へよう。まだ生れたばかりの國、歴史も傳統もないと同時に、まだ何の病氣も持たぬ無垢白紙の土地と言ふものは清々しいものである。世界中で最も新しい機構と最も進んだ施設との上に立たうとし、又立つことの出来る建設と創造との新興國と言ふものには、出來上つた文明國に見られず、求め得ぬ清新味と共に、創作的興味、夢の魅力がある。政事的にも、産業的にも、或は一般習俗の上にも、革命を経ずして革命と同じ新設計を樹て、善ければ即ちその設計通り直に取りかゝり、世界に先鞭をつけ得るといふことは愉快なことに相違ない。然もそこには、まだ何の憚りも、囚はるべき情實も、因襲さへも出來上つてはゐないのだ。

阿佛尼

鎌倉時代の女流歌人
歌人藤原爲家の室
藤原爲相の母
夫の歿後出家して阿
佛尼と稱す
弘安六年(西曆一
八二五)歿
書の名
古文孝經

九 いさよふ月に誘はれて 阿佛尼

むかし、壁のなかよりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世
の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづ
ぐきの岡の葛葉、かへすくも、書きおく跡たしかなれども、かひ
なきものは親のいさめなり。また賢王の人をすて給はぬ政に
ももれ、忠臣の世をおもふ情にもすてらるゝものは、數ならぬ身
ひとつなりけり。と思ひ知りながら、またさてもあらで、猶ほこ
の愁こそやるかたなく悲しけれ。
更に思ひつゞくれば、和歌の道は、たゞ實すくなく、あだなるす
さびばかりと思ふ人もやあらむ。ひのもとの國に、天石窟ひら
けし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世ををさめ物をや
はらぐる媒となりにけるとぞ、この道のひじりたちは記し置か



松岡映丘筆 六十日夜記

二たび勅を受けて
阿佛尼の夫爲家勅命
をうけて續後撰和歌
集と續古今和歌集と
を撰す

三人
爲顯
爲相
爲守

細川
播磨國美囊郡細川庄

れたりける。

さてもまた集をえらぶ人はためしおほかれど、二たび勅を受



阿佛尼
東京室博
藏館物博

けて世々に聞えあげたるは、類な
ほありがたくやありけむ。その
後にしもたづさはりて、三人の男
子ども、百千のうたの古反故ども
を、いかなる縁かありけむ、あづか
り持たることあれど、道をたすけ
よ、子をはぐくめ、後の世を弔へ」と

て、深き契をむすびおかれし細川のながれも、故なくせきとめら
れしかば、跡弔ふ法の燈火も、道をまもり、家をたすけむ親子の命
も、もろともに消をあらそふ年月を経て、あやふく心細きものか

子を思ふ心の闇
人の親の心は闇にあ
らねども子を思ふ道
に惑ひぬるかな

(藤原兼輔)

ら、何としてつれなく、今日まではながらふらむ。惜しからぬ身
ひとつは、やすく思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇は、猶ほしのび
がたく、道をかへりみる恨は、やらむかたなく、さてもなほ、東の龜
の鑑に映さば、曇らぬ影もや顯はるゝと、せめて思ひあまりて、萬
のはゞかりを忘れ、身を益なきものになし果てて、ゆくりもなく
いさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。
比はみ冬立つはじめの、さだめなき空なれば、降りみ降らずみ
時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れ散りつゝ、
事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂
しとても止るべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。
目離れせざりつる程だに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと
見まはされて、慕しげなる人々の袖の雫も慰めかねたる中にも、

侍従
爲相のこと
大夫
爲守のこと

侍従、大夫などの、あながちに打屈じたるさま、いと心ぐるしけれ
ば、さまざま、言ひこしらへぬ。

代々に書きおかれける歌の草紙どもの奥書して、あだならぬ
限をえりしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書きそへたる歌、

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ。

大夫の傍去らず馴れ來つるを、ふり捨てられなむ名殘、あなが
ちに思ひ知りて、手習したるを見れば

はるばると行くさき遠く慕はれて

いかにそなたの空をながめむ。

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、おなじ紙に書き添へ

つ。
つくづくと空な詠めそ戀しくば
道とほしともはやかへり來む。
とぞ慰むる。

粟田口

今の京都市東山區粟田口町

粟田口といふ所より車は返しつ。程なく逢坂の關こゆる程

に、
さだめなき命は知らぬ旅なれど

またあふ坂とたのめてぞゆく。 (十六夜日記)

一〇 神 道

本居宣長

皇大御國は、掛けまくもかしこき神御祖天照大神の御生れま

本居宣長

江戸時代の國學者

古事記傳を著す

伊勢松阪の人

享和元年(西暦一八一〇)歿、
年七十二

「萬千秋……」の句

古事記による

皇御孫尊

皇孫瓊瓊杵尊

せる大御國なり。大神の大御手に天つ璽を捧げ持ち給ひて、萬
千秋の長秋に吾が御子のしろし召さん國なり。」と宣ひしより、天
雲のむかふすかぎり、谷蟻のさわたるきはみ、皇御孫尊の知ろし
めす國と定まりて、天の下には荒ぶる御神もなく、まつろはぬ人
もなくなりぬ。それよりいく萬代の末まで、代々の天皇は大神
の御子とましまして、天つ神の御心を大御心として、神代も今も
へだてなく、神の道に隨ひ給ひて、安らけく平けくしろしめしけ
る大御國なりければ、古の大御世には道といふ言擧も更になか
りき。もとよりたゞ物にゆく道をこそ道とはいひけれ。物の
ことわりあるべきすべ、萬の教事をしも、何の道、くれの道といふ
ことは外國のさだめなり。然るを、やゝ降りて書籍といふもの
渡り來り、そを學び讀むこと始まりてより後、其の國の手ぶりを

ならひて、やゝ萬の事のうへに交へ用ひらるゝ御代になりてぞ、大御國の古の大御手ぶりをとり分けて、神の道とは名づけられる。そは、かの外國の道々にまがふがゆゑに神といひ、又かの名を借りてこゝにも道とはいふなり。その後御代を経るまゝにいやますゝその漢國の手ぶりを慕ひまねぶこと盛りになりゆきて、遂に天の下をしろしめす大御政も、もはや漢様かむやうになりはてて、青人草も心までぞ其の意にうつりにける。さてこそ、安らけく平けくてありこし大御國にも、みだりがはしきこと出で來つゝ、外國にやゝ似たることも後には混りにけれ。

そも、此の天地の間にありとあらゆることは悉く神の御心にて、天照大神高天原にましゝて大御光はいさゝかも曇りまさず、この世を照らし給ひ、又天つ璽も亡びうせぜ傳はりまし

高御産巢日神
天地開闢の時高天原に成りませる獨り神

薄田泣菫
詩人 文學者
大阪毎日新聞社囑託
名は淳介
明治十年(一九三七)生

て、宣ひしまに、皇御孫尊は天の下をしろしめして、天津日嗣の高御座は天地とともにときはにかきはに動くことなし。これ、この道の萬の道にすぐれて、靈しく奇しく正しき高き貴き徴なり。

そもこの道はいかなる道ぞと尋ねるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、この道こそはかしこき高御産巢日神の御靈によりて、神祖伊邪那岐大神、伊邪那美大神の始め給ひて、天照大神の受け給ひ、たもち給ひ、傳へ給へる道なり。故にこれを神の道とは申すぞかし。
(直毘靈に據る)

一一秋 懷

山森畑寺遠き牧場

薄田泣菫

落つる日、ゆく雲、歸る樵夫

いと似つかはしき色を帯び

ゆふべの心に溶けぞあへる。

たとしへもあらぬ静ころの

かすけき響を胸につたへ

わが歌ごころぞ温めましと、

田の畔踏みきて草に伏しぬ。

若し夜の幕の落ちむまでも

歌もあらでここに迷ひ居らば、

げに言ふかひなき才ならめど

さもあらばあれや、この夕の

えならぬ氣持にひたり得つる

思ひだにあらば歌はなくも……。

泣菫 詩抄

一二橋 曙覽とその妻

相馬御風

三十五歳で、祖先傳來の家業と家産とを弊履の如くなげ棄て

て、これを異母弟宣に譲り、妻直子・長男今滋と共に足羽山の草廬

に隠棲した曙覽は、そこに居ること僅かに三年で、更に城西の三

橋町に轉居し、自ら藁屋と稱して生涯をその陋居に送つた。彼

の其の草廬のいかに見すばらしいものであつたかは、壁くゞる

の彼の歌を見ても、其の一端を窺ふことが出来る。

そんな狭い家に、彼は二十年間もの永い歳月を極めてのびや

かに住みつゞけた。しかも彼には、長男今滋の外に菊藏・早成と

橋 曙覽

歌人

井手曙覽とも言ふ

福井の人

明治元年(五三)歿

年五十七

相馬御風

名は昌治

新潟縣の人

明治十六年(二五)生

足羽山

福井市の西南方

いま足羽公園といふ

福井市の中央なる福

井城の西

壁くゞる

壁くゞる竹に肩する

窓のうち、みじろぐ

たびにかれも枝振る

いふ二人の子さへあつたのである。

家はそのやうに狭かつた上に、生活の資に於ては彼は常に窮乏を告げ勝ちであつた。弟子達からの心附も、多少はあつたであらうし、潤筆によつての謝禮



橋 曙 覽

も少しは得られたであらうが、
曙 覽 そんなことで一家の口を糊して行くことは到底出来なかつたことは明かである。それに
も拘らず、彼は一旦自ら放擲した實家に對しては、鏹一文の援助をも乞はなかつたと言はれて

ある。たゞ彼は、時々母の生家から多少の援助を受けた。又最もよく自分を理解してゐた友人達に對して、折々無心を申出た

らしい。要するに彼の収入と言つては、それ位なものであつた。その貧しさのほどは推して知るべきである。

彼の歌にこんな詞書を添へたがある。

「長月ばかり、府中の山本氏の女ども、これかれひきまとひ來て、此の庵に宿りたること有りけり。着すべき夜の物などかねて人のもとよりかりきて、其のまうけしおきけるに、思ひがけざるをの子ひとり添ひ來て、それに着すべき物なし。日くれになりければ、又かりに行かんも便りあしきにより、ありあふ今滋がのを其のをの子に着せて、今滋は己がふしどの中にいれて寢さす。わらはなりしほどこそさしもあらるれ、今は大きなるからだになりぬれば、ひとりが身じろくたびに夜の物よりはづれて肩さきあらはれ、ともすればこはき手足、つきあ

府中
今の福井市のこと

てなどして寝まどふ。云々。これによつて見ても、彼の生活の不如意なほども偲ばれて、寧ろ微笑にさへも誘はれるのである。

さうした貧しさにも、彼は何時となしに、そこに一種の安らかなさを味ふやうになつたのであらうが、それにしても初めて彼が足羽山に隠棲した當座の彼のわびしさは、蓋し尋常一樣なものでなかつたらう。いかに自ら進んで選んだ道だと言へ、生れて三十五年を、所謂豪家暮しに慣れて來た曙覽にとりて、突如として飛込んだ其の貧しい草庵生活は、決して樂なものでなかつたに相違ない。それも剃髮出家者のそのやうに、自分一人だけのことならば兎も角、妻あり子ある彼としては、どんなに辛い思ひに悩まなければならなかつたか分らない。その間の消息は、

彼に次の如き歌のあつたのに徴しても、そのあらましを窺ふことが出来る。

世を遁れて後は、それとたのむべき生業もなく貧しう物しければ、人も養はず何わざも自らしつゝ、辛きめのみ見つゝ、過ぎにけるを、此の頃ひでり打ちつゞき、つね汲む井の水涸れぬれば、さらに遠きわたりより妻の汲みはこびつゝ、苦しともせで物するをあはれに見なして、

汐ならで朝な夕なに汲む水も

辛き世なりと濡らす袖かな。

如何に鉅萬の富に恵まれて居たといへ、繼母や異母弟等と共に營んでゐた從來の彼の生活は、殆ど絶え間ない物慾の醜い争や忌はしい感情の纏れの爲に、日毎に地獄にあるが如き苦惱の

うちに過ぎられたことであらう。それに比べれば、隠棲後の彼の生活は、物質上の不如意こそあれ、まるでそれは天國の如き安樂な世界であつたらう。随つて、隠棲當初に於ける彼及び彼の妻が、如何ばかりのびやかな氣持で朝夕を楽しみ得たかは、想像するに難くない。「ああ、これでやつと救はれた！おそらく二人ともさう叫ばずにゐられなかつたことであらう。

しかし、一旦はさうした安易な氣持を恵まれた彼等も、日を経るに隨ひ、新生活に對する興味が薄らぐと共に、やがては慣れない物質生活の不如意の前に、今更の如きわびしさと苦しさと不安とを感じずに居られなかつた時期が、なかつたとは言へないであらう。それでも曙覽自身には、なほさうした中からも、心を打ち込んで行くことの出来る歌の世界があり、學問の道があつ

た。しかし、彼の妻は……、そして彼の子は……、こんな風に私は曙覽の清貧生活への徹底の經路を考へる毎に、常に感歎措く能はざるところは、終始彼と生活を共にして、世にも稀な温かな家庭の經營者であつた



曙覽の妻直子のえらさに對してである。曙覽の妻直子は、同國三國港の豪商の家

筆蹟

且暮に燒刃ぬぐひて
息吹て、佩くはたが
ため大皇の爲 曙覽
太刀を味ず
同國 福井縣越前國
三國港 坂井郡三國町

に生れたといふ以上、決して最初から貧世帯に處するやうな教育など授けられたものとは思はれぬ。而も自ら進んで、夫曙覽と生涯その貧生活を共にしたばかりでなく、這裡に王侯をして羨ましめる程の平和な世界をうち建て、よく三人の男兒の教育

先子
故人となりし父

院本

丸本ともいふ
歌舞伎脚本の一種
操芝居の淨瑠璃を歌
舞伎劇に轉用したる
もの

堀川の段

「おしゆん傳兵衛近
頃河原達引」といふ
淨瑠璃の中巻の一段

をさへも常人以上に成し了すことを得た。これは全く驚歎に
値するほどの事實である。長子今滋の書いた曙覽小傳には、左
の如き美談さへ傳へられてゐる。

「室直子、資性貞淑、先子の曩に家産を弟に譲りて退隱せらるゝ
に方りて、親戚等、其の前途甚だ覺束なきを慮り、頻りに離縁を
勧めしに、直子笑ひて、院本堀川の段、人の落ち目を見捨てるは、
里の耻辱とする哩な。」の條を引き、以て決意を示す。親戚強ふ
ること能はず、遂に終始艱苦を共にし、以て内助の功を全うす。
今年齡九十に至るも健康昔に減ぜず。

而して今滋が此の小傳を草したのは明治三十六年であつた
が、直子はその後なほ十年の壽を保ち、大正二年丁度百歳で安ら
かに此の世を去つたと言ふことである。まことに奇蹟的に貴

い生涯を送り得た女丈夫と言つていゝやうな氣がする。

兎に角、曙覽のあの貴い清貧生活について考へる上に、この優
れた人格を持った妻の美しい愛についての考察を外にしては
ならぬ。曙覽をしてあの家庭を形造つたまゝでの清く安らか
な隱遁生活を徹底せしめたのには、此の稀有な美しい夫婦愛が
與つて力あつたと信じていゝ。此の夫の生活に對する妻の聰
明な理解と、美しい愛となくして、どうして曙覽のあれだけの貴
い清貧生活が營まれ得たであらう。其の點に於ては、曙覽は世
にも稀な恵まれた人であつた。

若し曙覽にして、あのやうな善い妻がなかつたとしたら、そし
てあのまゝの境遇に置かれてゐたとしたら、彼は果してどうな
つたであらうか。そこには、實にさまざまな暗澹たる悲劇の舞

臺が想像されると共に、最後には狂へるが如く世を遁れ行く一個の孤獨な隱遁者の寂しく痛ましい姿さへ目に浮かんで來るのを覺える。

曙覽の歌集中には、前に掲げた「汐ならで朝な夕なに……」と詠じて、妻の薪水の勞をいたはつた一首の他に、なほ數首妻の上を詠んだ歌がある。

野邊に藁屋作りて始めて移りける頃、妻の「かゝる所のすまひこそいと恐しけれ。聞きたまへ、雨いみじうなんふる。盗人などのくべき夜のさまなり。」などつぶやくを聞きて、春雨のもるにまかせてすむ庵は

壁うがたるるおそれけもなし。

野續きに家ゐしをれば、折々蛇など出でけるを、妻の見る度

壁うがつ
盜賊の侵入すること
をいふ

に打驚きて、うたて、物すごき所かな。」と言ひけるを慰めて、

おそろしき世の人言にくらぶれば

透迤ていいづる蟲の口はものかは。

松戸にて口より出づるまゝに

ふくろふの「糊すりおけ」と呼ぶ聲に

衣ときはなち妹は夜ふかす。

おのがすみかあまたたび所うつりかへけれど、いづこもいづこも家に井なきところのみにて、妻して水汲み運ばすること、かき數ふれば廿年餘りの年をぞ經にける。あはれ、今は妻もやう／＼老いにたれば、いつまでか斯くてあらすべきとて、貧しき中にも思ひわづらはるゝあまり、からうじて井ほらせけるに、いと清き水あふれ出づ。杓さくもて汲みと

糊すりおけ
ふくろふの鳴く聲の
「のりすりおけ」と聞
えるをいふ
地方によりては「の
りつけ干せ」と言ふ

らるべきばかりおほうあるぞいと嬉しき。いつばかりなりけん、汐ならで朝な夕なに汲む水もからき世なりとぬらす袖かなと、そゞろごと言ひけることのありしが、今はこの濡れける袖も、たちまち乾きぬべう思はるれば、この井の號を袖干井（そひのゐ）とつけて、

濡らしこし妹が袖干の井の水の湧き出づるばかり嬉しかりける。

獨樂吟の中に、

たのしみは妻子（こ）むつまじくうちつどひ

頭ならべて物を食ふ時。

たのしみは機織りたてて新しき

ころもを縫ひて妻が着する時。

これらの歌を讀んだだけでも、曙覽の貧生活のあらましがわかると同時に、彼と妻の間柄のいかに睦まじく温かであつたかが察せられる。豪商の家に生れ育てられ、更に又豪商の家に嫁した彼女が、急轉してさうした貧生活に入り、みづから進んで水仕事や機織まで獨手で營みながら、而も靜けく安らかな愛を以て生涯夫をいたはり、子等をはごくみ通した其のけなげさは、全く涙ぐましいまで貴く感じられる。

曙覽のあの安らかな樂貧生活は、此の良妻の存在を外にしては考へることは出來ない。
(曙覽と愚庵)

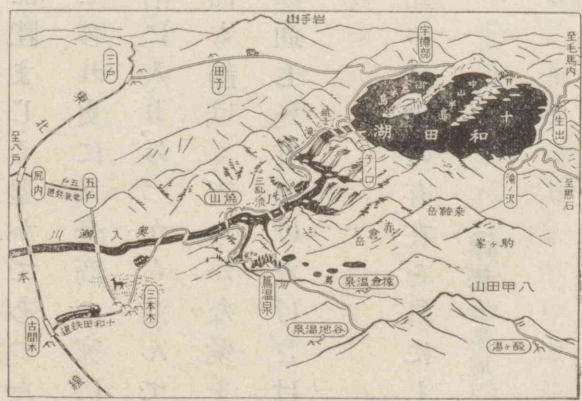
一三月の出に阿彌陀様が 大町桂月

「山は富士、湖水は十和田」と私は常に申居候。 葛温泉は十和田

大町桂月
文學者
名は芳衛
高知の人
大正十四年(二五)歿
年五十七
十和田湖
秋田青森二縣に跨る
湖面は海拔四〇一米
葛温泉
桂月の最も愛して滞
在し、且つ終焉の地
としたる所

古間木驛
青森縣北上郡
輕便鐵道
十和田鐵道
三木木町
北上郡

の山中にこれあり候へども、湖水よりは約十七八軒も離れをり候。東北本線の古間木驛より三本木町まで十六軒、輕便鐵道これあり、それより燒山と申す五六戸の小部落まで二十四軒、夏は自動車通じ申候。燒山は鳶川の奥入瀨川に合するところ、燒山より奥入瀨川を遡ること十四軒にして十和田湖に達し申候。此の十四軒の風致、溪流としては天下無類に候。十和田湖は御倉中山の兩半島の斷岸絶壁奇巖怪石老樹古木が天下無類に候。自動車は湖畔までも



十和田湖附近地圖

通じ申候。



燒山より鳶川を遡ること二軒、山坂を登ること二軒にして鳶温泉に達し申候。山中の一軒家に候が、風呂場は三つもこれあり、一は湯瀧これあり、一は狭長にして湯槽深く、一は廣大にして浅く、立てば湯が腰に及ぶだけに候が、湯槽の大きき凡そ六米四方にも及び、三方空地にて硝子窓これあり、浴しながら月を賞することを得申候。

土地は清淨、人は純朴、殊に今や積雪一米もこれあり、四月の末までは解け申さず候。積雪のために往來絶えて、心がのんびり致し候。

今や
一月一日

一三 月の出に阿彌陀様が

山毛櫨



穴熊



舊の
舊曆即ち太陰曆

宿の若者、數日の間に一度、雪を衝いて焼山へまゐりて郵便物を出し又受取り申候。焼山までは日々郵便集配人參り申候。私は引續き籠城して色々著述に従事し、雪解くる頃飛出して山登りを致し申すべく候。

葛温泉附近は山毛櫨の原生林にて、小湖五つ六つこれあり、雪なきときに逍遙して氣持よき處に候。ぼんどりとて猫が羽織着たるやうな怪物捕れ申候。「まみ穴熊も捕れ申候。何れも頗る美味に候。

今夜は舊の十一月二十七日に候。故郷の愚姉より手紙にて、



湖 田 和 十

今夜

大正十三年一月一日

故郷

高知

阿彌陀

(梵語)

浄土の主佛

阿彌陀佛又は阿彌陀

如來とも言ふ

鹽原

栃木縣鹽谷郡鹽原温泉

尾崎紅葉

名は徳太郎

小説家

江戸生

明治三十六年歿

年三十七

西那須野の驛

栃木縣那須郡太田原

の西にある東北本線

の停車場

那須野が原

那須火山の南東麓の

廣き裾野

「今夜は月の出に阿彌陀様がお現はれになるから拜め。」と申し來り候。姉は佛教信者にてそれを信じ居り候。私は信じ申さず候へども、親は既にこれなく、兄弟とて生き残れるは唯姉と私との二人、其の姉が南國にて見るらん月を、私は此の地に見て姉を偲ばんとて徹夜致し居り申候。

(書簡偉人天才を語る)

一四 鹽原

尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は變らざるその悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今なほ茫茫たる古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪

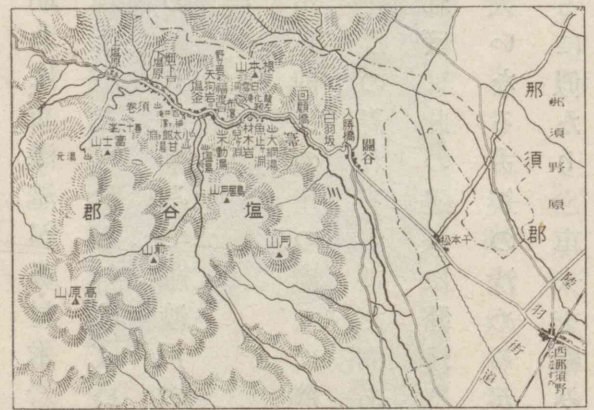
迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそのと見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに涼々の響ありて、これにかかれるを入勝橋となす。

輒ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く、疊み、嵐氣冷かに、壑深く陥りていくめぐりせる九折つゞきをりの、後には密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を開き、愈登れば遙かに木がくれの音のみ聞えし流れの水上は浅く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀑、小瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと、見すてがたし。

三十尺
約九米

車を驅りて白羽坂を踰えてより回顧橋みかへりばしに三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば、十二勝十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

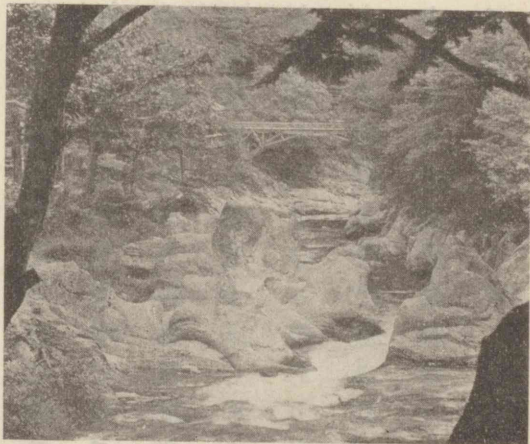
抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨にして、到る處巉巖の



鹽原附近

水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧。左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑瀧が鼻材木岩。五色岩、船岩などと眺め行けば、鳥居幕戸、前山の翠衣に染みて福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅川の残り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み處の名を問へば、不動澤といふ。



何百丈
一丈は約三米

遙かに望めば行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かざる、屏風巖地を抜く何百丈と見あぐる絶頂にはばらばらと松も危く立ちすくみ、幹竹割に割り放ちたる断面は、半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ」と、はるかにも車夫は案内す。

足にまかせて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添



天 狗 岩

蒲生氏郷
戰國時代の武將
會津(百萬石)の城主
文祿四年(三五)薨
年四十

はず、毛も生ひざれど、さま狀恐しげにうづくまりて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜な／＼天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「その昔、蒲生氏郷此の處に野立せしことあるに因りて野立石と申す」と、例のが説き出す。

率ゐたる車に乗りて急ぐ。甘湯澤、小太郎が淵など思ひやりつつ鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸はたかの里に着きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所ごか所に湧きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に満ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮

めらるゝなど、またあるまじき別境なり。我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消こして、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れてたり。

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遅かりし。山の麗しといふも壞の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかで壞と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚かものなれや。見よ／＼、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、籬の啼く音も、空の色も、皆自から浮世のものならで、我はこゝに憂ひを忘れ、悲しみを忘れ、苦しみ

を忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今より此の如くにしてわが生を終へんかな。(紅葉全集)

一五 隱形の咒

(太平記)

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞しめされんために、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ、御身の上に迫りて、天地廣しと雖も、御身を藏さるべき所なし。日月明らかなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくてもしばしはと思しめされける處に、一乘院

大塔宮

後醍醐天皇の第二皇子護良親王

主上

後醍醐天皇をさし奉る

虎の尾を

「心の憂危、虎の尾を踏み春氷を渉るがごとし。」(書經)

鶉の床

「風はらふ鶉の床は夜寒にて月かけ淋し深草の里」(新千載集 恒明親王)

一乘院

奈良、興福寺の塔頭

大般若
大般若波羅蜜多經全六百卷
唐の僧玄奘三藏の譯せし經文

の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節宮に付き奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵已に寺内にうち入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さればよし自害せんと思しめして、已におし肌脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらん期に臨みて、腹を切らん事はいと易かるべし。若しやと隠れて見ばやと思しめし返して、佛殿の方を御覽ずるに、大般若の唐櫃三つあり。その一つの櫃は御經を半ばすぎ取りいだして、蓋をもせざりけり。宮は、その中に御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形の咒を御心のうちに唱へてぞおはしける。若し搜しいださるれば、やがて突立てんと思しめして、氷の如くなる刃を

抜いて、御腹にさしあてて、兵こゝにこそ。といはんずる一言を待たせ給ひける御心のうち、推しはかるもなほ淺かるべし。さるほどに、兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも残る所なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開いて、御經を取りいだし、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出でさりぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道ゆく心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若し又兵立ちかへり、委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く兵ども又佛前に立返り、「前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。」とて、御經を皆うち

玄奘三藏

支那唐代の高僧、貞觀三年印度に入り佛教を究め、歸國の後經典の翻譯に従事す(六三―六四)

摩利支天

護國護民の神として、我が國中世の武人に尊崇せらる

十六善神

大般若經の守護神

觀世太夫

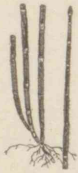
觀世十四世清親延享四年(四七)歿

勸進能

勸進の爲に興行する能樂

後には能太夫が一世一伏として催すものをいふ

木賊



移して見けるが、からくとうち笑うて、大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

一六 木賊刈

〔雨窓閑話〕

享保年中、觀世太夫、一世一代の勸進能を行ひ、京都の河原に舞臺を造り、棧敷を拵へ、芝居を興行す。見るものは蟻の如く群集せり。初日か二日目かに、觀世木賊刈を舞ふ。其の面白き事、見るもの感に堪へたり。爰に、いかに田舎めきたる百姓と覺しきもの十人許り連れ

立ちて、能を見物してありけるが、數千人の人數、悉く讚歎する中に、彼の百姓共は、さも思はぬやらん、何かひそく、囁き合ひてうけず顔なりけるを、觀世、舞ひながら此の體をきつと見咎め、さて能も終りければ、木戸へ人を遣はし、かくくしたる衣類着たる百姓十人許り、木戸を通らん時、必ず留め置き申すべし。尋ぬる仔細あり。」と言ひやりけり。

程なく、能濟みて、木戸を出でんとする時、かの百姓どもを差し留めけるゆゑ、何事かは」と大いに驚きしを、觀世騒がぬやうに樂屋へ呼びびて申しけるは、今日、我等木賊刈を舞ふ。其の出來たる事、凡そあるまじく思ふ心にて仕たりしかば、果して貴賤群集、おしなべて、感心の様子に見えたるが中に、其方共は、さも思はぬ様子にて、何やらん打ちひそみて、囁き合ひたるはいかにや。其の

さま不思議に思ふによつて、仔細を尋ね度く、木戸にて留めさせしなり。」と申しけり。

百姓ども申すは、我等ことは、信州のそのはら蘭原と申す所の土民に候。



木賊刈の舞臺姿

今日、木賊刈の能興行有るよし承り及び、我等も木賊刈る者共なれば、なぐさみながら能とやらんを見物して、一生の囁の種にもせまほしく思

ひて、今朝より芝居して見物する所、心なき賤の我々共も感心して、面白く侍り。さりながら、只今遊ばされたるうち、いでくさ刈らうよ。」と申す所、鎌の御手、我等が仕なれたるとは聊かか

蘭原
長野縣信濃國下伊那郡御坂越の山中にあり

はりある故、申す事にて候。と言へば、觀世打ちうなづきて、それはいと面白き見咎めやうなり。いかにして汝等は刈るか。と尋ねければ、されば、とくさはむかふへ一刀ひと切りに刈り申候に、今遊ばされたるを拜見いたし候へば、同じ所を前の方へ二刀ふたにて、御刈りなされ候を見申して候。あれにては木賊は刈られ申すまじく候。と言ひければ、觀世大いに感心して、物とらせつゝ、厚く賞して戻しぬ。

その後、觀世、江戸にて木賊刈を舞ひし時、先年信州の百姓らが批判せしをまもり、向ふの方かたへとくさを刈りければ、其の能の出來たる事大方ならず、みな目を驚かすに至れりとぞ。

某の人曰く、智者にも一失あり。愚者にも必ず一得あり。其の道に入れば、其の道を知る。信州菌原は、とくさの名所にて、

智者にも一失
智者の一失、愚者の一得
(俚諺)

智者の千慮、必ず一失有り、愚者の千慮、必ず一得あり

(史記)
(晏子春秋にも殆どこれと同じ文あり)

かの百姓ら數年其のとくさを刈りて手練し居ることなれば、觀世に鎌の手の違ひたりと申しける事、尤も殊勝なり。觀世も舞臺の上にて、自餘の人々には目もかくまじき所、あやしの百姓らが囁き合ふを、きつと見咎めしこそ、流石名人なれ。それのみならず、樂屋まで呼び入れて、底意なく尋問して、其の己が業の道を求むる端にしたること、言はんかたなし。世の人、藝術に凝り執心し、其の藝の奥義を得、或は妙所に至る、みな道に執心したるが故なり。されども、藝術に執心する人は多けれど、人の人たる道に執心する人は稀なり。觀世が百姓にとくさの鎌の手を聞きたるが如く、賤の男、賤の女たりとも、其の道をきかん時には、妙所に至る事有るべし。おろそかに思ふべからず。となり。

正岡子規
俳人 歌人
名は常規
松山市の人
明治三十五年(三妻)
歿
年三十六

一七 寫生

正岡子規

寫生といふ事は、畫を書くにも記事文を書く上にも極めて必要なもので、此の手段によらなくては、畫も記事文も全く出来ないと云うてもよい位である。これは、早くより西洋では用ひられて居つた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲に、此の頃は更に進歩して、一層精密な手段をとるやうになつて居る。然るに、日本では昔から寫生といふ事を甚だ疎かに見て居つた爲に、畫の發達を妨げ、また文章も歌も總べての事が皆進歩しなかつたのである。それが習慣となつて、今日でもまだ寫生の味を知らない人が十中の八九である。畫の上にも、詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が少なくないが、それらは

寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、其の實、理想の方が餘程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには及ばぬ事である。



正岡子規

理想の作が必ず悪いといふ譯ではないが、普通に理想として顯はれる作には悪いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考へを表はすのであるから、其の人間が非常な奇才でない以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より子供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには理想といふ事が其の人を感ぜしめる事が無い事はない

が、略、學問あり見識ある以上の人に見せる時などには、非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を満足せしめる事は出来ないであらう。これは、今日以後の如く教育の普及した時世には免れない事である。

之に反して、寫

生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居



筆規子

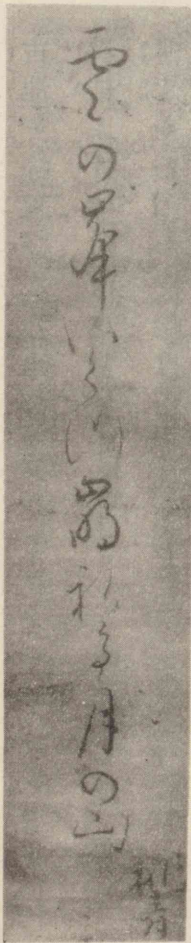
るだけそれだけ、寫生文、寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄なやうに見えても、深く味へば味はふ程變化が多く趣味が深い。寫生の弊害を言へば、勿論いろいろ

ろの弊害もあるであらうけれど、今日實際に當てはめて見ても、理想の弊害ほど甚だしくないやうに思ふ。理想と言ふものは、一呼吸に屋根の上に飛び上らうとして、却て池の中に落ち込むやうな事が多い。寫生は平淡である代りに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡のなかに至味を寓するものに至つては、其の妙實に言ふ可からざるものがある。 (子規全集)

○一八 小磯の小貝

落ちざまに水こぼしけり花椿。

松尾芭蕉



蹟筆青桃

松尾芭蕉
桃青とも言ふ
三重縣伊賀國の人
元祿七年(三三四)歿
年五十一
筆蹟
雲の峯いくつ崩れて
月の山 桃青

榎本其角

芭蕉の門人
滋賀縣近江國の人
寶永四年(三三六)歿
年四十七

筆蹟

體に桃裏の詩人髭白
し 其角

服部嵐雪

芭蕉の門人
兵庫縣淡路國の人
寶永四年(三三六)歿
年五十四

筆蹟

元日や晴て雀のもの
かたり 嵐雪

古池や蛙飛びこむ水の音。

粽結ふ片手にはさむびたひ髪。

薄氷やわづかに咲ける芹の花。

榎本其角

體に桃裏の詩人

髭白

其角

蹟筆角其

夕立や家をめぐりてあひる鳴く。

梅一輪一輪ほどのあたたかさ。

服部嵐雪

元日や晴て雀のもの

かたり

嵐雪

蹟筆雪嵐

濡れ縁や薺こぼるる土ながら。

山口素堂

山梨縣甲斐國の人
享保二年(三七七)歿
年七十五

山口素堂

黄菊白菊其の外の名はなくもがな。

一葉浮いて母に告げぬる蓮かな。

寒くとも三日月見よと落葉かな。

やれ壺に澤瀉細く咲きにけり。

上島鬼貫

行水の捨てどころなし蟲の聲。

筆蹟

初花や雲に根のある
よし野山
おにつら



炭 太祇

京都の人
明和八年(四三三)歿
年六十三

與謝蕪村

大阪の人
俳句並に畫の名匠
天明三年(三四三)歿
年六十七(又は七十)

家内して覗き枯らしし接木哉。

冬枯や雀のありく戸樋の中。

春雨や小磯の小貝濡るるほど。

春の海ひねもすのたりのたりかな。

炭 太祇

與謝蕪村

ゆめや雲に根あるよし野山

おにつら

蹟筆貫鬼

筆蹟
いかだしの蓑やあら
しの花ごろも

燕村

大島蓼太

江戸の人
天明七年(四七)歿
年八十

小林一茶

俳諧寺と稱す
信濃の人
不遇の生涯を送る
文政十年(四七)歿
年六十五

増鏡の發端

きさらぎの中の五日
は、鶴の林に薪つき
にし日なれば、かみ
如來二傳の御かたみ
のむつまじさに、嵯
峨の清涼寺にまうで
て、常在靈鷲山(なご
心のうちに唱へて拜
み奉る(増鏡序))

新島守

増鏡第二、建保七年
より承久三年まで
四月二十日
承久三年(八二)

富士一つ埋み残して若葉かな。

五月雨やある夜ひそかに松の月
猫の目のかまどに光る寒さかな。
朝晴にはちばち炭の機嫌かな。
痩せ蛙負けるな一茶これに在り。
うまさうな雪がふうはりくと。

蹟筆村燕

一九 新島守

〔増鏡〕

四月二十日、帝みかどおりさせ給ひ、春宮はるみやう四つにならせ給ふに譲り申

帝 第八十四代順徳天皇
春宮 第八十五代仲恭天皇
近頃みな此の御齡
にて
後鳥羽天皇は四歳に
て位につかせ給ひ、
土御門天皇も四歳で
受禪
御兄 第八十三代土御門天
皇
父 帝 第八十二代後鳥羽天
皇
家實 近衛基通の子
關白太政大臣従一位
道家 後京極良經の子
左大臣
あづまの若君
當時の將軍頼經
鎌倉に住す
院 第八十二代後鳥羽天
皇



させ給ふ。近頃みな此の年齢にて受禪ありつれば、これもめで
たき御行末ならんかし。同じき二十三日、院號のさだめありて、
今おりさせ給へるを新院ときこ
ゆれば、御兄みかみの院をば中院なかつのゐんと申し、
後藤 父帝をば本院とぞきこえさする。
鳥原 このほどは、家實のおとゞ關白に
羽信 ておはしつれど、御讓位の時、道家
天實 のおとゞ攝政になり給ふ。かの
皇筆 あづまの若君の御父なり。
さても院のおほし構ふること、
忍ぶとすれどやうく漏れきこ
えて、ひがしざまにも其の心づかひすべかめり。あづまの代官

にて伊賀の判官光季と言ふものあり。かつぐかれを御勘じのよし仰せらるれば、御方に参りつるつはものども押し寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はおぼしめしける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。「さるべくて身の失すべき時にこそあなれ」と思ふものから、討手の攻めきたりなん時にはかなきさまにて屍をさらさじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらすことは、思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔

我が身
北條義時
泰時
義時の子

足柄山
神奈川縣靜岡縣に跨る連山
箱根山
神奈川縣足柄下郡にある峠
關東第一の天險
古昔足柄山と共に交通の要路たりし所

鳳輦



また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまの死にをせんことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれ、打勝つものならば、ふたゝび此の足柄箱根山は越ゆべし。など泣く／＼言ひきかす。「まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいと危し」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりと哀れに心細げなり。

かくて打出でぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時たゞひとり鞭を揚げて馳せきたり。父、胸うちさわぎて、如何に」と問ふに、「軍のあるべきやう、おほかたのおきてなどをば、仰せの如く其の心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らん

宇治 京都の南八軒
宇治川にのぞむ
勢多 京都の東十軒
毘叚湖の湖尻
公經 藤原氏
西園寺家の祖
御うまご
將軍賴經
公經の女の出なり

に参りあへらば、其のときの進退いかかはべるべからん。この
ひとことをたづね申さんとて、ひとり馳せはべりき。といふ。義
時とばかり打案じて、かしこくも問へるをのこかな。そのこと
なり。まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかがあらん。
さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、偏にかしこまりを申
して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましな
がら軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦
ふべし。といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。
都にもおぼしまうけつることなれば、ものゝふども召しつど
へ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。
公經の大將ひとりのみなん、御うまごのこともさることにて、北
の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。其の母北の方は、

故大將 源 賴朝
七條院 後鳥羽天皇の御母
藤原殖子
修明門院 順德天皇の御母
藤原重子

故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さ
しいらへもせず、院の御心の軽きこととあぶながり給ふ。七條
院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大
納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、
次々あまた聞ゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立
つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。

中院 第八十三代土御門天
皇
新院 第八十四代順德天皇
富士川 静岡縣駿河國
天龍川 静岡縣遠江國

中院は、飽かで位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物した
まはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも殊
にまじらひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさ
のことなども掟ておほせられけり。
いつの年よりも五月雨晴れ間なくて、富士川、天龍などえもい

はず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉もおよばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ満ちたり。いかがあらんと君も御心みだれておぼしまどふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、頼もしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、つひに御方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたりまどふ。

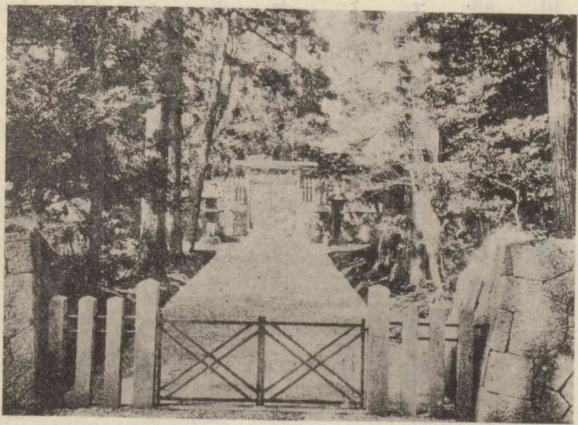
保元のためし
保元の亂に崇徳上皇を讃岐に遷し奉りし前例
女院
七條院・承明門院・修明門院等
鳥羽殿
京都の南方鳥羽にあつた離宮
城南離宮とも言ふ宮々
雅成親王・頼仁親王
隱岐國
島根縣の國名
ものにもがなやとりかへすものにもがなや世の中を、ありしながらの我が身と思はん（源氏物語 河海抄）
信實朝臣
藤原信實
有名な畫家
文永二年（九三三）歿年八十九

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれば、女院宮々、所々におぼしまどふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあやしげなるにて、七月六日いらせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。其の日、やがて御ぐしおろす。御年、よそぢに一つ二つやあまらせ給ふらん。まだいとほしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して御姿うつしかゝせらる。七條院に奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、此の世のおなじ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける代々の報いにかとうらめし。

佐渡國
今の新潟縣佐渡郡

その年
承久三年
土佐國の畑
高知縣幡多郡
本院
第八十二代後鳥羽天皇
土佐院
第八十三代土御門天皇
佐渡院
第八十四代順德天皇

新院も佐渡國に遷らせ給ふ。上達部殿上人、それより下、はた残るなく、此の事に觸れにしたぐひは、重く軽く罪に當るさまいみじげなり。中院は初より知ろしめさぬことなれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらんこといとおそれありとおぼされて、御心もて、其の年閏十月十日、土佐國の畑といふ處に渡らせ給ひぬ。



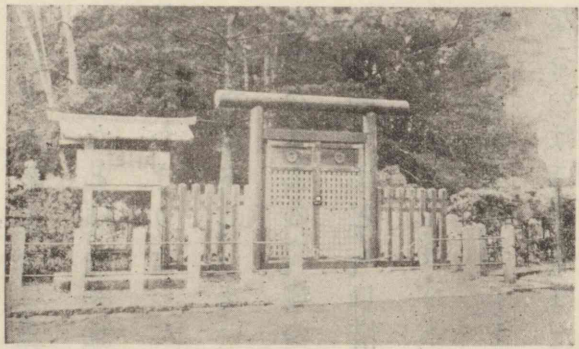
順德天皇黑水御所址

本院は四つにて位につき給ひて、十五年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじこ

津の國の

津の國のこやとも人を言ふべきに、ひまこそなけれ葦の八重ぶき（後拾遺集和泉式部）
攝津國三島郡昆屋野
藐姑射の山
藐姑射山に仙人有りて居る（莊子）
仙人の住所。轉じて仙洞御所といふ
霞のほら
これも霞洞即ち仙人の居所より轉じて仙洞即ち上皇・法皇などの御所にいふ

となりしかば、すべて三十八年がほど、此の國のあるじとして、萬



土御門天皇御所址

機ものまつりごとを御心ひとつにをさめ、百ひゃくの官つかをしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれび、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやうやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住みすまひ、いく春をへても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一

ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのが散りくゞにさ
 すらへ、磯の苦屋に軒を並べて、おのづから言問ふものとは、浦
 に釣するあま小舟、鹽やく煙のなびくかたをも、わがふるさとの
 しるべかとはかり眺め過ごさせ給ふ御住ひどもは、それまでと
 月日をかぎりたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさは、いと
 心細かるべし。まいて、いつをはてとかめぐりあふべきかぎり
 だになく、雲の濤、煙の浪の幾重とも知らぬ境に、世をつくし給ふ
 べき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

此のおはしますところは、人ばなれ、里とほき島のなかなり。
 海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きやか
 なるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊な
 ど、けしきばかりことそぎたり。まことに、柴のいほりのたゞし

柴のいほりの
 いづくにも住まれず
 ばたゞ住まであら
 ん、柴のいほりのし
 ばしなる世に（新古今集西行法師）

水無瀬殿

後鳥羽天皇の御造り
 遊ばされし御殿
 大阪府攝津國三島郡
 島本村
 二千里の外
 三五夜中新月の色、
 二千里外故人の心。
 （白氏文集卷四詩句）

ばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめ
 かしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。
 水無瀬殿おぼし出づるも夢のやう
 になん。はるく、と見やらるゝ海
 の眺望、二千里の外ものこりなき心
 地する、今さらめきたり。しほ風の
 いとこちたく吹きくるをきこしめ
 して、

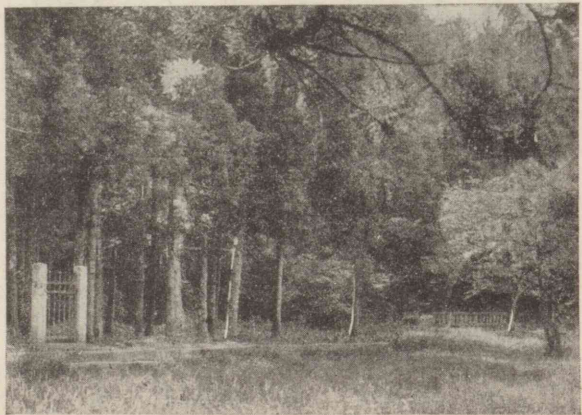
我こそは新島守よおきの海の

あらし浪風心して吹け。

同じ世にまたすみのえの月や見ん

けふこそよそにおきの島守。

（増鏡第二）



後鳥羽天皇行在所址

源平盛衰記の發端
祇園精舎の鐘の聲、
諸行無常の響あり、
沙羅雙樹の花の色、
盛者必衰の理を顯は
す。奢れる者も久し
からず、春の夜の夢
の如し。猛き心も終
には亡びぬ。風の前
の塵に同じ

鳥なる父

治承元年(一一七一)鬼界
島に流されし俊寛僧
都のこと

治承二年歿
年三十七

孤兒

こ、は俊寛の娘

三人同じ科

藤原成經・平康頼及
び俊寛の三人

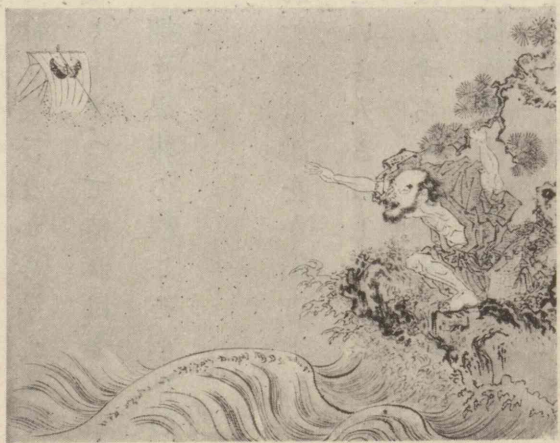
二〇 鳥なる父へ

〔源平盛衰記〕

その後頼りなき孤兒となりはてて、御行方をも承る便りもなし。身の有様をも知らせ參らせず、いぶせさのみ積れども、世の中かきくらしして、晴るゝ心地なく侍り。さても、三人同じ科にて一つ島に遷されけるに、二人は赦さるゝに、などか御身一人残り留まり給ふらんと、人知れぬ歎き、唯思し召しやらせ給へ。人々、島へ流され給ひて後、その縁の者をば尋ね求めて、手足を損じて責問ふべし。など聞え侍りしかば、召使ひし者共も、遠く國々へ落失せて、ふる里に一人も留まらざれば、都には草のゆかりも枯れ果てて、立紛るべき方もなく、あはれいとほし。と言問ふ人もなし。

鞍馬
京都府山城國愛宕郡
京都の北十二軒にあ
る村

「公達も召捕らるべし。など聞えしかば、母御前、弟わが身三人打具して、かすかなる便りにつきて、鞍馬の奥とかやへ迷ひ入り、日影も見えぬ山里に、住みも習はぬ柴の庵に忍びゐて候ひし程に、朝夕は御事をのみ歎き給ひしに、打添ひて、幼き身々の行く末いかにせんと、暇なき御物思ひの積りにや、病とならせ給ひたりしかば、弟と二人、とかく勞り慰め參らせしかども、叶はずして、空しく見なし參らせぬ。生きての別れ、死にての別れ、せん方な



俊 寛
歌 川 國 直 筆

ければ、二人歎き暮し、泣き明かし侍りし程に、弟も疱瘡とかや申すいたはりをして、今年の五月に身まかり侍り。同じ道にと歎きしかども、はかなき露の命と言ひながら、消えもやらで、つれなく今までは草の庵に残り留まつて侍れば、憂き事も悲しき事も思し召し知るべし。拙き果報の程こそ、宿世の身のつとめ恥しく思ひ侍れ。

故母御前御いたはりの時、われ死なば、誰をか頼りと憑みおはしますべき。奈良の里に姨といふ人おはします。尋ね行きて、打歎かば、さりとて憐み給はんずらん。と仰せられしを承りおきて、當時は奈良の姨御前の御許に侍り。おろそかなる事にはあらねども、かすかなる住ひ、推し量り給へ。さても、この三年まで、いかに御心強く、有とも無とも承らざるらん。母御

奈良の里
今の奈良市

前にも弟にも後れて、憑む方なし。誰に預け、如何にせよと思し召すにか。疾くして御上り給へ。戀しとも戀し、ゆかしともゆかし。三年の思ひなげき、水莖に盡くしがたく侍れば、留め候ひぬ。あなかしこく。

(源平盛衰記卷十二)

二一 春日淺光

吉田絃二郎

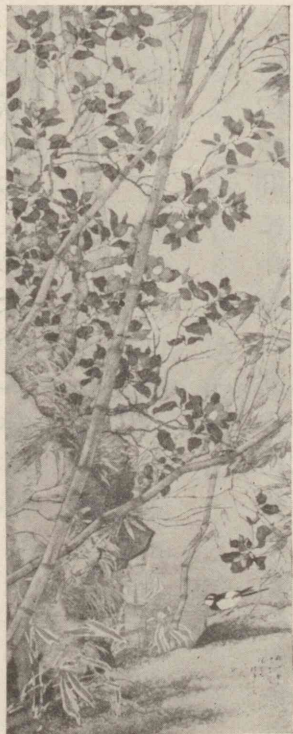
上

いつの間にか、庭の隅の山椿が眞つ紅な花瓣を、その厚ぼつた葉の間から覗かせてゐる。椿の根方には、まだ五六寸の雪が積つてゐるが、何處からともなく淡い土の香が漂うて来る。春だ。榊も櫻も櫟も楡もまだ冬枯れのまゝの姿であるが、三月の青

吉田絃二郎
文學者
本名は源次郎
佐賀縣の人
明治十九年(三四)生
五六寸
一寸は約三種

空にすく／＼と枝を伸ばして、日の光を抱かうとでもしてゐるかに見える。こずゑの端々までも、すでに春の氣が充ち満ちてゐる。

今年はとりわけ寒さが厳しかつたせゐるか、春を待つ心も、春を



山松 林桂 椿月 筆

待つよろこび
もいつになく
強い。人は老
いるにつれて
愈、春を待ち、春

を惜しむ心も強くなるのであらう。

「わきて見む老木は花もあはれなり今いく度か春にあふべき」と西行はうたうてゐるが、あはれなのは老木ばかりではない。

老いてゆく人もあはれである。「今いくたびか」の歎きは春に逢ふごとに感じさせられることである。

長い陰惨な冬を忍び生きて来たことも春の日を待てばこそであつた。どんなに春を貪り、生きても飽き足りぬほどのよろこびや嬉しさが、空の色にも、やゝ濕りを帯びた微風にも感じられる。年に一度春に逢ふ嬉しさのために、人は生きてゐるやうにさへ思はれる。

春の訪れは先づ黒い土の香からはじまる。凍りついてゐた土が、柔かな日の光に解かされ始めるにつれて、土の香はわたくしたちの魂を打ちつゝ、忍び寄る。廐の藁の香、赭土徑の香、草山の香、木立の香、すべてが先づ春の訪れをかすかな香に感じさせ

さかすかな春の香は、同時に三十年四十年前の故郷の思ひ出をも眼ざめさせる。雲雀も鳴いてゐた。人々は馬の屍を麥畑の隅に埋めてゐた。村中の子供たちが集まつて来て、焚火の煙にむせながら死馬を眺めてゐた。見渡すかぎりは菜の花と麥の平原であつた。霞につままれた平原をへだてて、古城の矢倉の壁が白く映つてゐた。

櫛の林には、終日小鳥が囀つてゐた。そこは、佐賀の亂に江藤新平が首を梟せられた場所といふことであつたが、子供心にも桑畑と櫛山の間を走つてゐる一筋の徑は寂しかつた。古城の石垣のあたりには、二抱へも三抱へもあるやうな楠の老木が聳えてゐた。楠の下は城の濠になつてゐて、春雨の日な

佐賀の亂

明治七年春
江藤新平・島義雄等、
征韓論反對の政府に
不満を懷いて、佐賀
で起しし内亂
江藤新平
政治家
佐賀の人
明治七年(三十四)歿
年四十一

かいつぶり



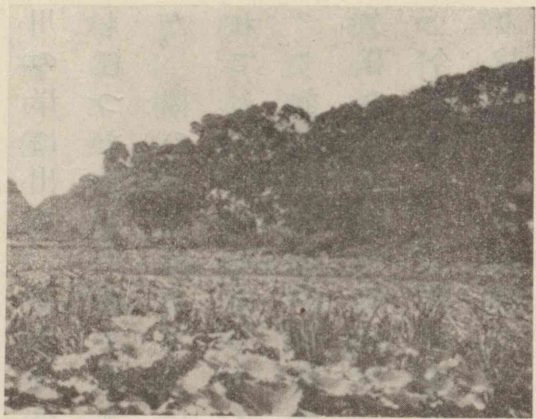
烏貝



辛夷の花



どかいつぶりが水をくぐつては鳴いてゐた。かいつぶりの鳴く濠のあたりでは、烏貝といふ大きな貝が取れた。一緒に烏貝を取りに行つた二人の遊び仲間の中、一人は死に、一人は旅に出たまゝ、消息も絶えた。武藏野の黒い土の中から辛夷の白い花が咲きはじめた。武藏野の春もうれしいが、三十年四十年前の故郷がなつかしい。年ごとに故郷の土を戀ふる心は強くなつて行くやうに思ふ。殊に春になれば。



故郷の古城

スケッチブック
寫生帖

三四日前、わたくしは雑木林の中を歩いてゐた。ところどころに春の雪がとりのこされてゐた。雑木林の小徑を下つて小川の岸に出た。そこには百年以上も経つたらしい樗が四本並んでゐた。樗の根方はまだ深い雪に掩はれてゐた。わたくしはスケッチブックを出して、四本の樗を寫生して夕暮の道を歸つて來た。

今朝、わたくしは再び雑木林を通り抜けて小川のほとりに出た。川のほとりには、七八人の男たちが立つてゐた。男たちは、すでに三本の樗を伐り倒して、最後の樗の



春 淺 木 雜 林

いたゞきに綱を懸け、三人の男は長い柄の鋸を挽いてゐるところであつた。やがて一人の男が根の切り口に二本三本の楔を叩き込んだ。わたくしは川を渡つて隣の丘へ雑木林をくゞつて行つた。二三丁も道を歩いたところ、恐しい地響きをさせて倒れて行く大きな樗の音を聞いた。

武藏野の麥畑の間を歩きながらも、わたくしは伐り倒された四本の樗の姿を心に描いてゐた。すでに春の芽を出さんばかりに、梢の端々までも色づきかけてゐた樗の姿が思ひ出されてならなかつた。

暗い雪の日の間は、裏の柚子の木の下わづかばかりの黒い土をあさつて、小鳥が集まつて來た。雪を掻き、黒い土の上に米を撒いて置くと、いつも三羽四羽の小鳥が竹林の間を飛んで來

ては餌を啄んでゐた。
 春になつて、あたりの山の雪も解けてからは、小鳥等は柚子の木の下には來なくなつた。ちよつと寂しい氣もする。
 春の雪は踏むからに淡い感じがする。さくさくと踏まるゝごとに、未練氣もなく解けて行くのが、一抹のあはれさを感じさせる。

雪の解けた後には、すでに露の臺が頭をもたげてゐる。赤い木瓜の花が地に這ふやうにして咲いてゐる。軽い雨に濡れては楡や櫟やエゴの芽が青々と伸びて來る。名もなき雜木山ではあるが尊く拜まれる。
 秩父から大山、さらに箱根あたりの山々には、なほはろくくと春の雪がたゆたうてゐる。まだ冬枯れの面影をたゞへてゐる

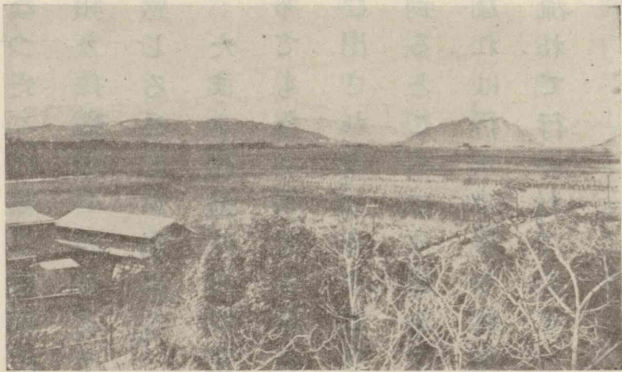
木瓜の花



大山：箱根



冬のころは、餘程快晴な天氣でなければ滅多に小鳥の聲を聽



野 櫟

武藏野の雜木山を歩きつゝ、心もすゞろに遠い山の雪を眺め暮らすのも、さすがに春なればこそである。

昨日までは山深く巢ごもりしてゐた小鳥たちが、今日は柔かな日の光りを浴びて、家ちかく梢から梢を鳴きつれて飛んでゐる。

春浅く、梢はまだ冬の影をこめて冷たい網の目をひろげてゐるが、そこには春を待ちわびてゐた小鳥たちの聲が、終日愁人の心に通ふ。

沈丁花の花



くこともなかつたが、辛夷の花が咲き、沈丁花の花が薫るやうになつたこの頃では、雨に濡れつゝも、小鳥は高い木のてつぺんで頻りに囀つてゐる。そこにも、春を待ち得たもののよろこびを感じることが出来る。

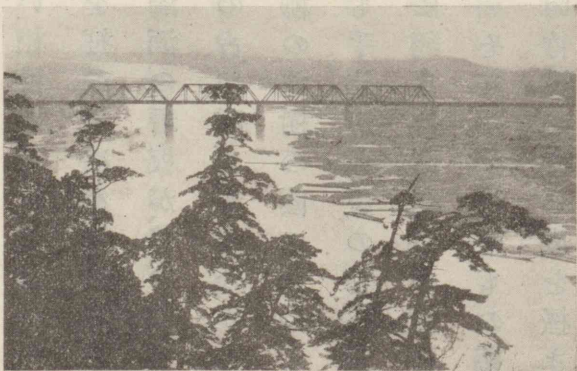
たま／＼道ばたの柔かな蘂蕪を見出したりすれば、草に寝てあてもなく美しい夢を見てゐた遠い過去の自分自身の姿が思ひ出される。あのころは、東京も江戸川・目黒川あたりには、まだ到るところに水車小屋があつた。春も老けて花の散るころになれば、行人の影も稀に、雪のやうに白く落花が川の面を埋めて流れて行つた。

下

多摩川沿ひの田圃もすつかり春の水を湛へて、雨上りのころ

多摩川
武蔵野臺地の南に沿
うて流れ、東京灣に
注ぐ川

などは沼のやうに見える。千鳥の群が、磧から飛んで来ては田圃に下りて餌をあさつてゐる。朝早く田圃を歩いて見ると、浅い水の底一面に、可憐な千鳥の足跡が散らし模様を描き出されてゐる。水の面を低く鳴きつれて行く千鳥の聲は、やゝ寒いやうに思ふが、さすがに春だ、立ちこめた一面の霞は、やがて千鳥の群をも柔かに包んでしまふ。



多摩川

武蔵相模の境にちかい町を歩いてゐたのは、一箇月前の大雪の日であつた。わたくしは吹雪の中に、町の出外れで馬に草鞋を穿かせてゐた馬子を見た。今日同

武蔵
國名
東京府に屬す
相模
國名
神奈川県に屬す

じ國境の町を歩いて見ると、紅梅は散り、桃の蕾がふくらんでゐる。麥畑の上には雲雀が高鳴きしてゐる。東京から數里はなれたばかりの古い相模の町には、白い壁の酒倉がつゞき、傘を張る家があり、蹄鐵を打つ鍛冶小屋がある。柳の枝に無造作にくゞりつけられた濁酒の看板が、昔の酒望子を想はせるのも春だ。わたしは、相模の古い町を歩きながら遠い故郷の町を懐ひ出した。そこでは柳の並樹の蔭にいつも柗絲を染めてゐた紺屋があつた。一町も手前から藍の香が漂うて來た。すい〜と古い町を一直線に翔る燕が、間口の廣い、奥行の深い紺屋の土間を抜けて行つた。そこには幾つもの藍瓶が並べられてゐて、若い男がいつも長い竹竿で瓶の底を掻き混ぜてゐた。

わたしは今日も武藏野を横切つて、相模の町に出た。わたしは相模の町の名を知らない。相模の丘の名を知らない。赤松山・雜木山・赭土の路、草山を越えては相模の村、相模の町を見出す。町を歩みつゝ、疎らな家並の間に、菜の花を見、木瓜の花、辛夷の花を見、さらに遠く野焼きする山を見、雪につゝまれた丹澤や大山の蒼然たる山壁を見る。春の日の光りを浴びつゝ、見知らぬ町を歩み、見知らぬ山を歩くのは懐かしいものだ。いつとはなしに、遠い旅を歩いてゐるやうな孤獨の嬉しさを感じる。小さな村外れの桃畑、竹林、杉木立までが、旅の心に映つて來る。白い雲がわく。一筋の徑を歩みつゝ、白い雲を追ふ。春の雲は、やがて草山の霞に溶け、沼の面の靄に消える。

春の日の暮れるころ、春の夜の月を眺めるころ、春の夜の微風を感じるころ、連翹・沈丁花・山吹の花を見るころ、雨催ひの夜にやがて蛙の音を聴くころ、思ひ出は切々として人の心に迫る。

二二 人臣の道

北畠親房

凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その跡を憐れびて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望を致すこと、自ら危うする端なれど、前車の轍を見ることは、誠に有難き習ひなりけんかし。中古までは、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。

神皇正統記の發端
大日本は神國なり。
天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此の事有り。異朝には其の類無し。此の故に神國といふなり
北畠親房
吉野朝の忠臣
正平九年(一二四)薨年六十二
凡そ王土にうまれて
溥天の下、王土に非らざる莫く、率土の濱、王臣に非らざる莫し (詩經)
前車の轍
前車の覆るは後車の戒 (漢書)

鳥羽院
第七十四代鳥羽天皇



北畠親房
先進
繡像

り。果して身を滅ぼし家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬すること
を停むべし。といふ制符、度々ありき。
源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。

この頃よりの諺には、一たび軍に駈け合ひ、或は家子郎從節に

死ぬる類もあれば、我が功におきては日本國を賜へ。若しは、半國を賜はりても足るべからず。などと申すめる。誠にさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又、朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり」といへり。白地にも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。さきに記し侍りし如く、堅き氷は霜を履むより至る習ひなれば、亂臣、賊子といふものは、その初め、心、言葉を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるに

七夕同詠七夕久しき
和歌
大納言源親房
雲乃うへに千年のあ
きをかぞふれば、契
もひさしほしあひの
そら

北 島 親 房 筆 蹟
冷 泉 爲 紀 藏

言語は君子の
樞機は君子の樞機、
樞機の發は榮辱の主
なり(易經繫辭上傳)

筆 蹟
七夕同詠七夕久しき
を契る

和歌
大納言源親房
雲のうへに千年のあ
きをかぞふれば、契
もひさしほしあひの
そら
堅き氷は霜を履む
より至る
霜を履んで堅氷至る
(易經)

許 由
堯の時の隠士
帝 堯
支那上古の君
巢 父
堯の時の隠士
五 臟
心・肝・脾・肺・腎
六 腑
大腸・小腸・胃・膽・三
焦・膀胱

もあらず、草木の色の改まるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。
昔、許由といふ人は、帝堯の、國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父これを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。よく思ひ習はせる故にこそあらめ。なほ行末の人の心思ひやるこそあさましけれ。大方、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の恨みを残すべき事をばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて限りなき人に分たせ給はん事は、推しても量り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況んや日本の

將門
平將門

山田新一郎
元北野神社宮司
福岡縣の人
元治元年(三五四)生

昌泰二年
紀元一五五九年

半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを、謀叛の始めといふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にも侍りけん。昔は人の正しくして、自から將門に見も懲り聞きも懲り侍りけん。今は人の心の斯くのみなりにければ、此の世はよく衰へぬるにや。
(神皇正統記)

二三 菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は、菅公が太宰府で薨去された後には、住むべき家もなく、吉祥院といふ菅原家の菩提寺の一室に寄寓してをられたので、普通、吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年、夫人の五

醍醐天皇
第六十代
從五位下
後に從四位下に進め
らる

延喜元年
紀元一五六一年

東風吹かば
(拾遺和歌集)

十の賀の時に、醍醐天皇はわざ／＼祝賀の勅使をお遣しになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつた事は考へられる。菅公の御子方は、なか／＼大勢であつたが、上の方の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流された程、そろつて相當な地位に出身されたところから見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助も亦與つて力のあつたことと思はれる。

延喜元年正月二十五日、菅公が俄かに太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれぞ。

菅公の夫人

(拾遺和歌集)

君が住む

(拾遺和歌集)

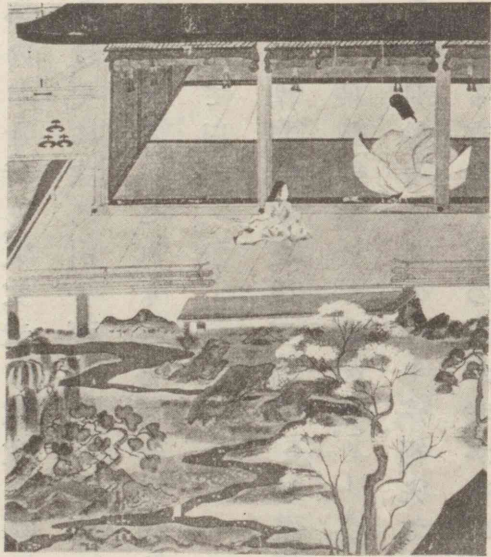
と詠まれたのは、梅花に寄せて最愛な夫人に別れを惜しまれたものとも言はれよう。西遷の途すがら、都への便りにことづけて、

君が住む宿の木ずゑを行く行くも

かくるるまでにかへり見しはや。

と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟の情もしのばれるのである。夫人が京都の留守邸に於ける獨居の様子は、菅公が太宰府で作られた詩で多少窺はれる。公の太宰府で衣食住共に缺乏し、悲惨極まる二箇年の月日を送られたに較べて、京都の方も亦劣らぬ境遇であつたことが想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩のうち、雪夜家竹を思ふ」と題して、家僕は早く逃散しぬ。

去年今夜
去年の今夜清涼に侍
し。秋思の詩篇獨り
腸を断ちき。恩賜の
御衣今此にあり。捧
持して毎日餘香を拜
す。(菅家後集)



菅公梅花別訣
北野天神起
別訣
起

寒を凌ぎて誰か掃撒せん」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷の事を氣遣つてをられる。この詩は、延喜元年即ち去年今夜の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦

い下男どもも早々に逃出して權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてをられた事は、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として現はれてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが、家書を読む」と題して曰く、

消息寂寥たり三月餘。

便風吹著く一封の書。

三月餘りも都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日はいかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、嬉しい事である。西門の樹は人に移し去られ。

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つた。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたのであらう。

北地の園は客を寄居せしむ。

天神御所の北地と言へば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これが昨日まで右大臣として、天皇の寵遇斜でなかつた菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を読まれたであらうか。紙に生薑をつつんで藥種と稱し。昔の草根本皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのである。

天神御所
公の屋敷址を後世か
くいふ

から、言はば生薑は家庭衛生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。困難のうちでも苟くもせられぬ夫人の用意の程が知られる。

「竹に昆布を籠めて齋儲と記す。」

内のお祭のお供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布を貰つたからとて、御子方の總菜にもされず、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌の用にしまはれたと言ふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明かに、京地に残された菅公一家の生活状態を菅公の筆で現はしてゐる。何たる悲惨な境遇であらうか。その半面には、夫人が凜乎たる決心を以て百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、薬餌の果てまでも注意してをられる、誠に行届いた齊家の有様がありあ

りに見えるではないか。

「妻子飢寒の苦しみを言はず。」

これ、還つて余を懊惱せしむるを愁ふるが爲なり。

留守宅の現状は前の如くであるが、それを唯その通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言も言うては來ぬ。言はないどころか、お留守はとにかくどうかやつてゐますと却て安心を求めて來る雄々しさは、なか／＼並々の婦人で出来る事ではない。榮華をこれ事とした當事の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人と言へようと思ふ。夫人は京都の北野神社の相殿あひだのに祀られてある。

(梅花遺芳に據る)

北野神社
官幣中社
京都市上京區馬喰町

樋口一葉

女流小説家

名は夏

東京の人

明治二十九年(三五五)

歿

年二十五

二四 初雛を祝ひて同じく返事

一 初雛を祝ひて

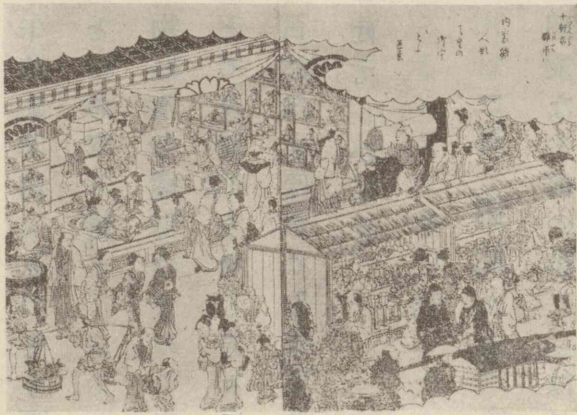
樋口一葉

日ごとのどかに成り増り候。みなく様、いとど御機嫌よう
 渡らせ給ふらんと御嬉しく存じ候。
 此の程承れば、お千代様もはやお高笑ひ遊ばされ候とや、誠に
 ものを引き延すやうにすくくと御生長、さぞかしお樂し
 の御事なるべく、お羨ましく存ぜられ候。私娘にも、一人は有
 らせ度しと望み居候へど、これのみは甲斐のなき事にて、當人
 もしきりに欲しがり居り、せめてはあやかり奉らばやと、此の
 朝ぼらけ、自身十軒店へ参り候うて、御初節供のお祝ひのしる
 しばかり、五人囃子一組、これ奉りくれよとに御座候。

十軒店

東京市日本橋區本町
 と本石町との間に沿
 ふ大通の通稱
 昔から節供の雛人形
 を賣る家が多いので
 名高い

御處々より種々きらびやかに参らせおはします御中へ、お恥
 しきさまなれど、御心安さに任せ
 て、娘が心ばかりに候。納め給は
 らばかたじけなく、裏の園に切ら
 せたる桃一枝、まだ蕾がちに候へ
 ど、添へて御覽に備へ候。



十軒店
 東都
 雛市
 記事

二 同じく返事

御ころ入れのお祝ひ物ならび
 に御後園の花をさへ添へて賜はりしかたじけなさ。ともに
 雛壇のさかえと取りはやし申候。何事の式作法もえ辨へ申

橋町
東京市日本橋區の町名
番町
東京市麹町區の町名

藤岡作太郎
國文學者
美術史家
文學博士
號は東圃
金澤の人
明治四十三年(一九二〇)
歿
年四十一

さず、あやしきさまに候へど、處々よりの賜はり物とり並べ、其のもとにて白酒一盃參らせ度きころ、構へに候まゝ、三日は午前より御入りのやう願はまほしく、御兩娘さまとも是非にと待ち奉り候。

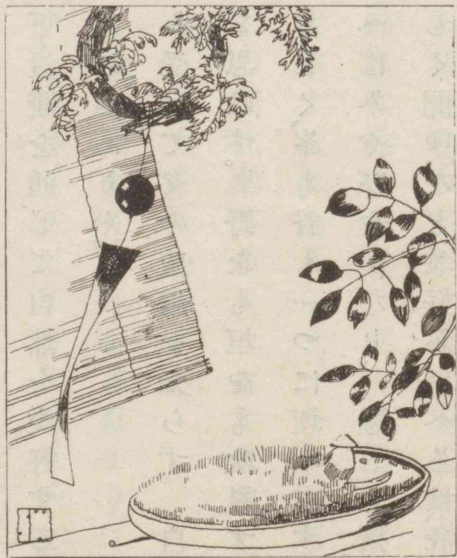
物好みの橋町はまゐり申さず、御心安き番町の人々、其のほかとても淡泊とせし方々に候間、かならずしくおむづかしう思召したまはらぬやう、取りあつめて申上候。御禮は御めもじにて。かしこ。

二五 自然の愛

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の

利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。

天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草を懐かしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品玩具などの多かる中に、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えてみづくしく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて座敷に飾り、庭に植込む。裏



草 忍 と 蔘 稗

カンテラ
提燈
(ポルトガル語)
燭臺

稗時

徒然草に見ゆ

長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗時作りて田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖げに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は、母の慈愛をのみ受けて父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「恐しき猪もふするの床と稱ふるにやさしく聞ゆ」など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きく

恐しき猪も徒然草に見ゆ

するに、卵の花くたし時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

○ 自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。文學には、源氏物語の卷の名に夕顔、末摘花、葵、柳朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤、袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等あり。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも福壽草、白梅、阜月、あやめ、萩、紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふなかれ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するも

源氏物語
紫式部の作
五十四帖

のは、從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。



花に對する我等の趣味が如何に異なるかを見よ。薔薇は活今何に異なるかを見よ。薔薇は尾津枝ながら幹ながらの姿は美は屋しきにあらざ、花一輪の色の艶花子に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に互り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時西洋人は花ばかりをちぎつて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置

チューリップ



ヒヤシンス



く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石、盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ、ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美しきことかある。されど、有るか無きかの黄花を捧げて、なほたよくと下蔭の蟲の音にも揺ぐ様、ますほの色はやがて白くほ、けて露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形に非ず、賦色に非ずして、その風情にあり、直に自然の懷にわけ

入りてその眞實を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尙ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

(國文學史講話)

二六 春を待ちつつ 詩一章 島崎藤村

一 春を待ちつつ

大寒も近づいた。深い雪でも来るかと待受けさせるやうな空模様の日が續きに續いた。年の始めの屠蘇を祝へ、雑煮を祝へと言つたのは、つい昨日のことのやうに思はれてゐるのに、最早松の内も過ぎて、部屋の壁に掛けた裏白や譲り葉もすでに取り捨てた。來さうで來ない雪の代りに、今日はまた寒い正月らしい風が町を吹き廻してゐる。

島崎藤村

詩人

文學者

名は春樹

長野縣の人

明治五年(五三)生

裏白



譲り葉



窓に近くゐて、半生の旅のことを思ひ出して見る。自分等が出發した當時のこと、平素は忘れて居てめつたに思ひ出しもしないやうな若い日のことまでが、何となく自分の胸に浮かんで來る。

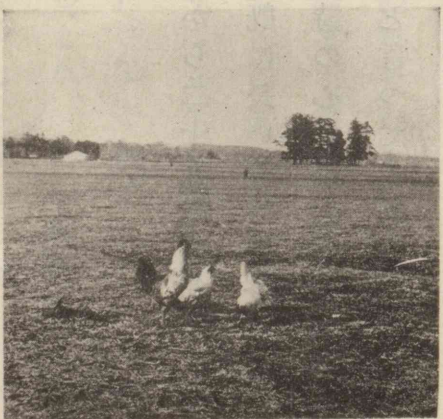
宮城野

仙臺市の東方の野



心の宿の宮城野よ、
みだれて熱きわが身には
日影も薄く草枯れて、
荒れたる野こそうれしけれ。

獨り寂しきわが耳は
吹く北風を琴と聴き、



野 城 宮

悲しみ深きわが眼には
色なき石も色と見き。

今から
大正十四年から

この古い旅の歌を書いたのは、今から二十九年の前にあたる。青年時代の私には、これを書く前に、既に長い冬の背景があつた。ある人は私の古い詩を評して、私の詩の心は否定の惱みでなく、肯定の苦しみに巢立つたものだと言つてくれた。あの言葉は自分でもよくうなづける。こゝに記した數行の詩の句の中にも、青年時代の私の心持は出て居るかと思ふ。

不思議にも自分の半生の旅は、この早い出發點で決してしまつた。私は、まだ年も若く心も感じ易かつた時代に、一旦自分の選んだ方針が、こんなにも長く自分を支配するかと思つて、心ひ

そかに驚くこともある。前途は暗く胸の塞がる時、幾度となく私は迷つたり、蹉いたりした。私の歩いた道がどんなに寂しい時でも、しかしその究極において、いつでも私は自分の出發した時と同じやうに、生を肯定しようとする心に歸つて行つた。世にはさまざま／＼な人があり、さまざま／＼な性格があり、さまざま／＼な生涯がある。長い旅の途中には、私は「經驗」そのものと言ひたいやうな髪の白い翁にも逢つた。物に澱まず、滯らず、世と共に推し移ることを私に囁やいて見せるのも、その髪の白い翁だつた。ある友達はまた私の傍へ来て、あまりに人生を重く見るな、あまりに眞劍になるものではないと、私にさゝやいてくれることもある。「愚かなるものは思ふこと多し」とか。實に齷齪とした自分などは、青年時代に踏み出した時と少しも變りのないやうな、

それほど長い夢を今日まで見つけて居る。そして眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものの無かつたと言ふやうな春の來ることを信ぜずにはゐられないのである。さう言へば、あの早春の先驅のやうな深い雪が來て町を埋めるのも、最早そんなに遠いことでもないだらう……。(藤村讀本)

二 詩 二 章

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ。

緑なす蘂萋は萌えず

若草も藉くによしなし。

小諸
長野縣北佐久郡
古城
懷古園
遊子悲しむ
遊子岐路に泣く
(揚子法言)

佐久
小諸町の近所一帯の
地
南北兩佐久郡あり

しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る。

あたたかき光はあれど
野に滿つる香も知らず。

浅くのみ春は霞みて

麥の色はつかに青し。

旅人の群はいくつか

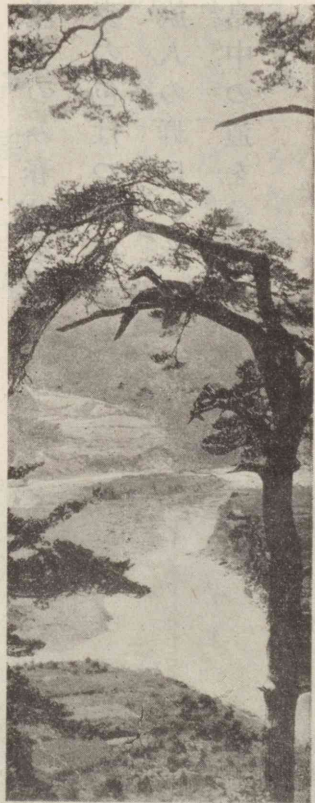
畠中の道を急ぎぬ。

暮れ行けば浅間も見えず、
歌哀し佐久の草笛。



小 諸 の 古 城

千曲川いさよふ波の
岸近き宿にのぼりつ。



千曲川

濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

千曲川旅情の歌

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ。

この命なにを齷齪
明日をのみ思ひわづらふ。

いくたびか榮枯の夢の
消え残る谷に下りて、
河波のいさよふ見れば
砂まじり水巻き歸る。

嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ。
過にし世を静かに思へ、
百年もきのふのごとし。



小諸の古城

高瀬舟
底の扁たい小さき川

森 鷗外

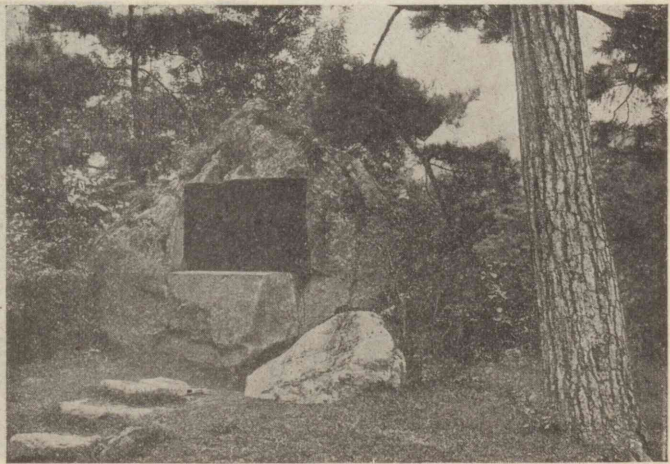
名は林太郎
醫學博士
陸軍軍醫總監
帝室博物館總長
大正十一年(一九二二)薨
年六十一
高瀬川
加茂川の分流
西のは鳥羽にて桂川
に入り、東のは伏見
にて淀川に入る

千曲川、柳霞みて
春淺く水流れたり
ただひとり岩をめぐりて
この岸に愁ひを繫ぐ。
(藤村詩集)

二七 高瀬舟

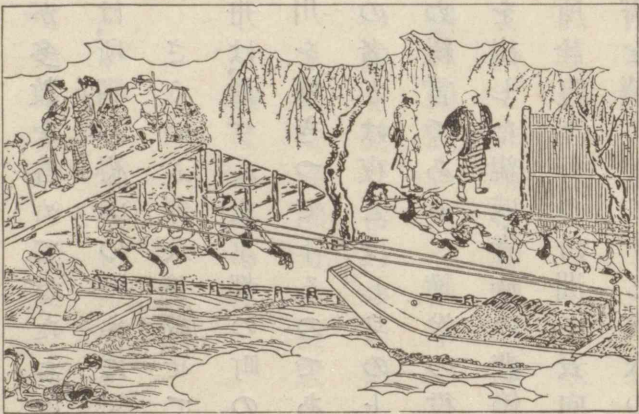
森 鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出



藤村詩碑

されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高



高瀬舟拾遺都名所圖會

瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此の同心は罪人の親類の中で、重だつた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して

盜をするために、人を殺し火を放つたといふやうな、憚惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために思はぬ科を犯した人であつた。

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつも悔んで返らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて罪人を出した親戚・眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町奉行の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にも窺ふことの出来ぬ境遇である。同心を勤める人にも、いろ／＼の性質があるから、此の時たゞう

るさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ／＼と人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになる、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか。多分、江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類の無い、珍しい罪人が高瀬舟に載

白河樂翁

松平定信

奥州白河城主

徳川幕府の老中

文政十二年(一八三〇)薨

年七十二

寛政

光格天皇の時代

(一四九—一五〇)

知恩院

京都の東山にある淨

土宗の本山

せられた。それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、只喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分を公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫和を装つて、權勢に媚びる態度では無い。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりで無く、絶えず喜助の舉動に細か

い注意をしてゐた。

其の日は夕方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やう／＼近寄つて来る夏の温さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立騰るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水の嘩きを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かなかゞやきがある。庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして、不思議だ、不思議だ、と、心の内で繰返してゐる。それは、喜助の顔が、縦から見ても、横から見ても、いか

にも楽しさうで、若し役人に對する氣がねが無かつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟を宰領をしたことは幾度だか知れない。併し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに、此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が悪い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情といふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのでは

あるまいか。いや、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や舉動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらへきれなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前、何を思つてゐるのか。」

「はい。」

と言つてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、みづまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然問ひを發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疏ぶんすをしなくてはならぬやうに感じた。そこ

で、かう言つた。

「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、おれは先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。おれはこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろ／＼な身の上の人だつたが、どれ／＼島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て、一緒に舟に乗る親類のものと、夜どほし泣くにきまつてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體、お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにっこり笑つた。

「御親切におつしやつて下さつて有難うございます。なる程、島へ往くと言ふことは、外の人には悲しい事でございませう。

其の心持は私にも思ひ遣つて見る事が出来ます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございませう。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいませう。島はよしやつらい處でも、鬼の栖む處ではございませう。私はこれまで、どこと言つて自分のゐて好い處といふものがございませうでした。今度お上で島にゐるとおつしやつて下さいませう。そのゐるとおつしやる處に、落着いてゐることが出来ます。先づ何よりも有難い事でございませう。それに私はこんなにかよわい體ではございませうが、ついぞ病氣を致したことはございませうから、島へ往つてから、どんな

辛い仕事をしたつて、體を痛めるやうな事はあるまいと存じます。それから今度島へお遣はし下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。かう言ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。

「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませんねが、私は今日まで二百文といふお鳥目を、かうして懐に入れて持つてゐた事はございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べら

れる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又借後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずに食べさせていたゞきます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりません。それにお牢を出る時に、此の二百文をいだゞきましたのでございます。かうして、相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は、私が使はずに持つてゐることが出来る。お鳥目を自分の物にして持つてゐるといふことは、私に取つては、これが始めてございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るかわかりませんが、私は此の二百文を島でする仕事のもとにしようと楽しんでをります。かう言つて、口を噤んだ。

庄兵衛は、「うん、さうかい」とは言つたが、聞く毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も言ふことが出来ずに、考へ込んで黙つてゐた。庄兵衛は彼此初老に手の届く年になつてゐて、もう女房と四人の子供がある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と言はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで、女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。そ

れは、夫が借財と言ふものを毛蟲の様に嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は、五節供だといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと言つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めてもらつたのに氣が附いては好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衛は今喜助の話を書いて、喜助の身の上をわが身の上引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くしてしまふと言つた。いかにも哀れな氣の毒な境遇である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶

持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄さへ、こつちは無いのである。さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持はこつちから察して遣ることが出来る。しかし、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は、世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つげさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう／＼口を糊する事の出るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに

驚いて、生れてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛は、いかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大きな懸隔のある事を知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬ事があるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一杯の生活である。然るに、そこに満足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしよう、といふ疑懼が潜んでゐて、折妻が里方から金を取出して來て穴填めをした事などが分ると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。

一體、此の懸隔はどうして生じて來るだらう。只うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるか

らだ」と言つてしまへばそれまでである。しかし、それは嘘である。よしや、自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。「この根柢はもつと深い處にあるやうだ」と庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生と言ふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病が無かつたらと思ふ。其の日々の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄へがないと、少しでも蓄へがあつたらと思ふ。蓄へがあつても、又其の蓄へがもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先きから先きへと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏止つて見せてくれるのが、此の喜助だと、庄兵衛は氣がついた。

庄兵衛は、今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

(鷗外全集)

二八 女性の自覺

徳富蘇峰

多くの人は、東洋では婦人を、牛馬の如く虐待してゐた。と言ひ、或は「今尙ほ居る。」と言ふ者さへある。東洋と言つても、印度もあれば、支那もある、朝鮮もあれば、日本もある。必ずしも一概に論ずべきではあるまい。

記者は、日本の歴史を回顧するにつけ、如何に日本の婦人が、歴史上に、大いなる働きを爲したるかを疑ふことが出来ぬ。申すも畏けれども、神代卷に於ける天照大神より、上代に於ける神功

徳富蘇峰
史學者
評論家
貴族院議員
東京日日新聞社社長
名は猪一郎
熊本縣の人
文久三年(五三)生

平 政子
 北條時政の女
 源頼朝の室
 北條氏は平氏から出た故に平といふ

皇后や、近くは我が叡智淑徳の典型たる、昭憲皇太后に至るまで、みな然らざるはない。其上に於てかくの如し。其の下における者に至りては、固より數ふるに遑あらず。若し記者の言に疑ひあらば、何人にせよ、其の母たり、妻たり、姉妹たり、子女たる者について點檢せよ。果して日本の女性は、男子に比して劣れるか否か。吾人は今茲に東洋婦人の待遇問題を、歴史的に論ぜんとする者ではない。虐待の事實もあらう。優遇の事實もあらう。それを詳細に吟味するは、姑く他日に譲り、兎にも角にも歴史上に於ける女性の働きは、決して輕視すべきではない。其の表面に顯はれたるもの、尙ほ然り。況んや其の冥々の裡における力に於てをや。

エリザベス
 (一五三三—一六〇三)
 イングランドの女王
 一五五八年より崩御まで位にあり

北政所
 豊臣秀吉の正室
 秀吉の薨後は高臺院といふ
 淺野長政の従妹
 寛永元年(三六四)歿
 ヴィクトリヤ
 (一八一九—一九〇一)
 イギリスの女王
 一八三七年より崩御まで在位

村岡
 村岡の局
 津崎左京の娘
 勤王家
 近衛卿に仕ぶ
 京都の人
 明治六年(五三)歿



皇女アリマ

若し、平政子をして英國にあらしめば、エリザベス女皇と何れが大なる仕事を爲し得べかりしか。吾人には容易に明言することが出来ない。すなはち秀吉夫人北政所の如き、其の賢明にして秀發なるは、恐らくはヴィクトリヤ女皇以上であつたらう。日本從來の歴史家は、餘りに女性を輕視したる傾向があつた。それにも拘らず、彼等は著名なる女性を、無視する譯には參らなかつたではないか。近くは維新の風雲に際しても、近衛家の村岡の如き、筑前の野村望東尼の如き、或は水戸家に於ける烈公の文明夫人の如き、或は千代田城大奥に於ける姉小路の

野村望東尼

勤王家

本姓は浦野氏

名はもと

福岡の人

慶應三年(五七七)歿

年六十二

文明夫人

徳川齊昭の正室

有栖川熾仁親王の王女

明治廿六年(三五三)薨

年九十

姉小路

姉小路の局

本姓は橋本

明治の初年に歿す

如き、何れもみな丈夫優りの役目を勗めてゐるではないか。吾人は斯かる歴史的位地を占めたる日本の女性が、此の昭和の御代に於て、更に大いに奮ふ所あるを期待せねばならぬ。今日に於て、徒に新奇を標榜し、漫りに狂悖なる詭説に迷ひ、禽爲獸行の社會を目して、自由解放の樂天地と爲すが如きは、大いなる心得違ひである。日本の女性の使命は、日本内地に於ける男女の平衡を恢復するのみならず、世界に向つて、黄白人種の平衡を恢復するにあることを知らねばならぬ。これこそ、正しき意味に於ての日本女性の自覺であり、且つあらねばならぬ。(持身小訓)

昭代女子國文 卷六

終

新版昭代女子國文 卷六

文部省檢定濟

高等女子學校國語教科用科 昭和三十三年二月二十二日

昭和十二年八月十九日印刷
昭和十二年八月二十二日發行
昭和十三年二月十二日修正再版印刷
昭和十三年二月十五日修正再版發行



編者

東京市杉並區西田町一丁目七百七十三番地

金子彦二郎

發行者

東京市神田區神保町一丁目五番地

上原才一郎

發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地

光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
(振替) 口座東京三二七番

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社 根本力三

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

西村孝子

広島大学図書

0130449267

